

511
145

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁹ 1 2 3 4 5

始



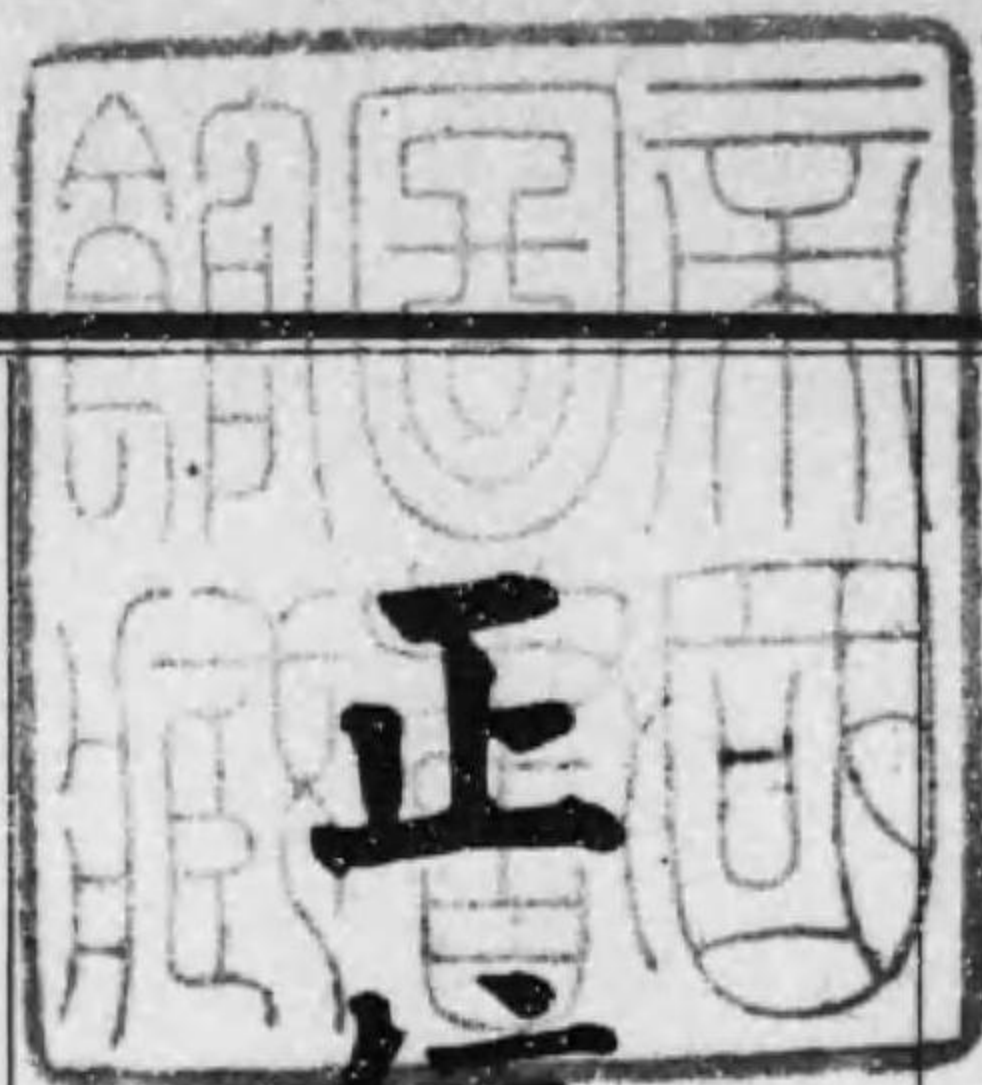
本派本願寺教學部公認

正信偈略釋

全

平安專修學院編纂

大正
15. 4. 17
內交



歸命无量壽如來
 南无不可思議光
 法藏菩薩因位時
 在世自在王佛所

親鸞聖人筆蹟(本派本願寺所藏 教行信證之中)



安城御影(本派本願寺所藏)

序

學校教育に適當なる教科書を缺くことは、教ふるもの教へらるゝものゝ共に不便とする所なるのみならず、教育の効果にも甚大なる影響を齎らすものなり。わが本派本願寺に於ては、宗門初期の教育にあたり、夙に教授要目を作り、教科書の完全なる編纂を企劃せらるゝところあり、屢々派内の蘊蓄ある學者、經驗に富める教育家を招きてこれが完成を期せらる。而かも未だ一定の好材無かりしが、わが平安專修學院は十數年來特にこの方面に苦心し、謄寫代用として再三稿を改め、以て教科書編纂に精進するところありき。

由來宗教々育は、各々事情を異にするところによりて、その方法も亦千態あるは寧ろ當然のことに屬す。これが宗門の學校に於て實施せらるゝ場合、その教科書の編纂は殊に重大なる意義を有す。乃ち一の聖典を須ひて

これが訓詁的解釋を施すを可とせんか、若くは達意的方案を以てするを良とせんか、是れ從來識者の間に反覆論議せられたるところなり。思ふに宗門初期の教育にありては、この兩者を適當に鹽梅し、學ぶ者をして興味と熱情とを以て自ら嚮はしむるの途を講ぜざるべからず。

茲に多年の經驗に基き、如上の趣旨に據り、一定の教科書編輯を思ひ立ち、本派本願寺の公認を受け、清水興教書院主の好意に依り、專修學院各學年に通じてこれを上梓することを得たり。予の歡びやこれに過ぎたるものなし。蓋しその宗門教育に裨益する所尠なからざるべきを信ずればなり。終りに、この教科書編纂が主として龜川輔教の容易ならざる努力に俟ちたることを記して深厚なる謝意を表す。

大正十五年二月

平安專修學院長 渡邊隆勝 識

例言

一、本書は主として佛教專修學院・佛教學院の宗乘教科書用として、且つはまた本願寺派本願寺の教師檢定試験受験用にも供せらるゝやう編纂した。

一、本文の内容は概略四項目に分つた。その大意の下は文科を主としてその句が前後と如何なる連絡を持つて居るかを説明し、字釋には、各句の難解なる文字を摘出してこれを註釋し、通釋はその課全體の意味を概説し、而して研究問題の下にはその課の中に於て特に研究すべき重要な題目を摘出した。特に煩雜に亘る餘論は備考として掲出しておいた。

一、研究問題は、教授上時間の都合に依り、略詳は教師の加減に委すやう特に題目のみをあげたわけである。蓋し字釋を會得する

ときは概ね研究問題の解答は爲し得られるのであるが、特にこれを深く研究せむには教師の指導を俟つてなさるゝやう希念しておく。

一、本文の下部に細字を以てその句の出據を掲出しておいた。一字一句高祖の獨斷にあらざることを示すためである。

一、七高僧一々についての詳細なる傳記は、平安專修學院編纂の印度支那佛教史要並に日本佛教史要に譲り、今は極めて簡略に止めておいた。

大正十五年一月

正信偈略釋 目次

第一章	一偈の綱要	一
第二章	歸敬文	九
第三章	如來因位の誓願	二二
第四章	如來果上の徳相	二八
第一節	佛光照明の徳	二八
第二節	名號攝化の徳	三三
第五章	釋迦の正説	三七
第一節	出世の本懐	三七
第二節	信心の勝益	三三
第一項	同一味の益	三三
第二項	心光常護の益	三六
第三項	迷界超出の益	三九

第四項 諸佛稱讚の益……………四一

第三節 難信と勸誠……………四四

第六章 三國高僧の相承……………四六

第七章 龍樹菩薩……………四九

第一節 釋尊の豫言……………四九

第二節 難易二道……………五四

第三節 信因稱報……………五七

第八章 天親菩薩……………六〇

第一節 造論指導……………六〇

第二節 一心の顯揚……………六三

第三節 現當二益……………六五

第九章 曇鸞大師……………六六

第一節 師徳の讃嘆……………六六

第二節 論註の顯揚……………七一

第三節 往還廻向の相狀……………七四

第十章 道綽禪師……………七六

第一節 聖淨二門の分判……………七九

第二節 萬行と念佛……………八二

第三節 凡愚開導……………八三

第十一章 善導大師……………八七

第一節 佛正意の開顯……………八七

第二節 所化の機と能化の法……………八九

第三節 信心の體とその利益……………九二

第十二章 源信和尚……………九六

第一節 自行と化他……………九六

第二節 二修と二土……………九八

第三節 專修の現益……………一〇一

第十三章 源空上人……………一〇三

第一節 智解と悲心……………103

第二節 片州弘通……………105

第三節 信疑決判……………107

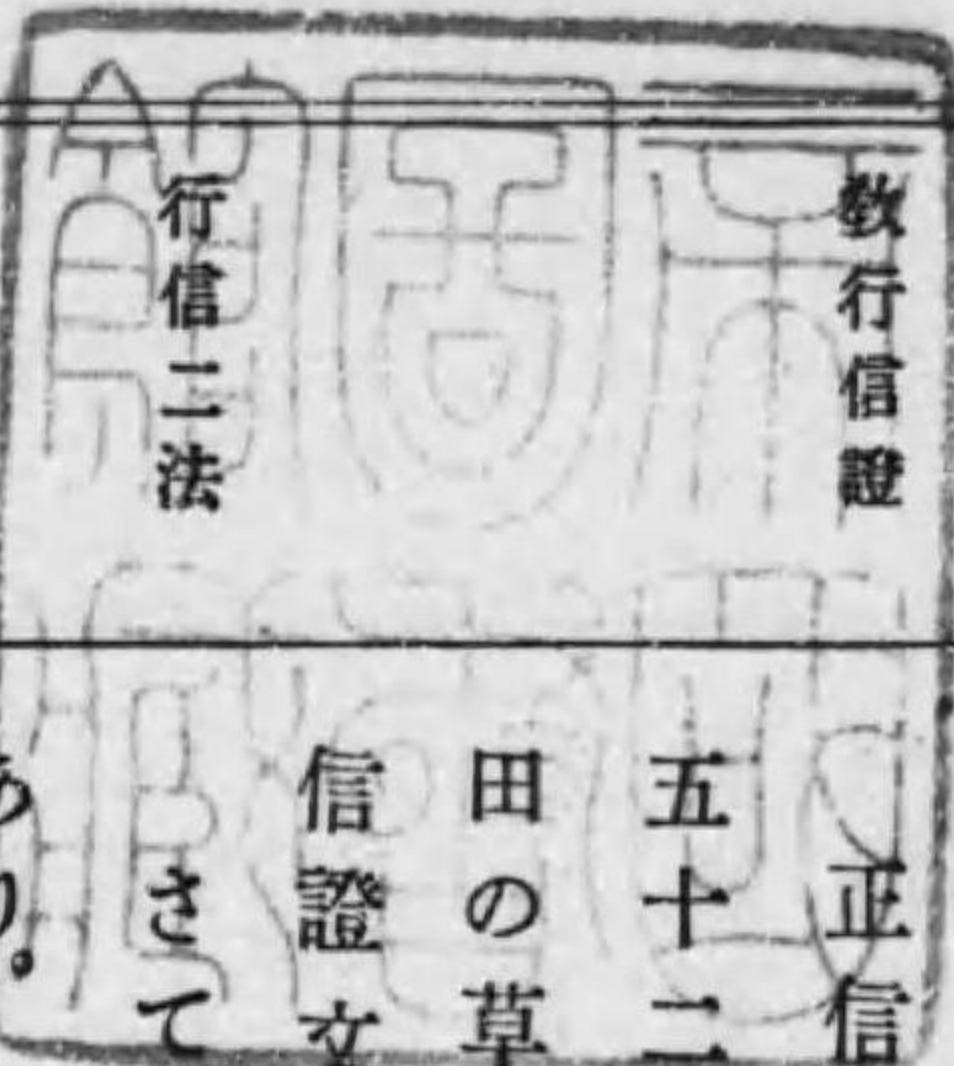
第十四章 結 勸……………110

正信偈略釋 目次畢

正信偈略釋

第一章 一偈の綱要

正信偈具さには正信念佛偈と云ふ。浄土真宗の開祖親鸞聖人五十二歳の時、即ち後堀川天皇元仁元年（西紀一二二四年）常陸國稻田の草庵に於て作りたまふところの浄土真宗根本典籍たる『教行信證文類』（卷六）の第二行卷の終に出たる一百二十句の偈文なり。蓋し『教行信證文類』は眞實の四法を説き、如來眞實の廻向に依り、凡夫は信ずる一念にて報土往生を得ることを説き述べたまふにあり。而も今偈は更にその要を摘出し、偈前の文に明かに「凡そ誓願に就て眞實の行信あり」と云ひ、行信について眞實と方便と



の二あり。今云ふところは正しく眞實の行信なりと示し、以て正信偈を頌出したまふ。

然らば眞實の行とは何ぞ、謂く第十七願に成就せられたる南無阿彌陀佛の名號なり。眞實の信とは何ぞ、謂く第十八願に誓はせられたる至心信樂欲生の三信なり。

凡そわれ／＼凡夫が佛になるためには、その因たる功德善根を積まざるべからず。然るに彼の阿彌陀如來はかねて愚鈍の凡夫到底修行に堪へざることを知らしめして、自ら代つて永劫の修行をなしたまふ。その修行によつて積みたまひし善根功德を南無阿彌陀佛の六字としてわれ／＼衆生に廻向したまふ。よつて名號をさして大行と云ふ。衆生はたゞこの南無阿彌陀佛の名號を信ずる一念にて、一切の善根功德を悉く領納し、佛力を以て往生即成佛の證を開く。こゝを以てこの信心を他力廻向の大信と云ふ。

大行大信

本典の中心

この上は衆生の方には往生の因行としての自力策勵は要なし、只領受したる名號を口に出してその恩徳を謝するのみ。

こゝを以て大行と大信とは全く不離の關係を有し、大行は衆生をして信ぜしめ往生せしめんための悲智圓滿の果徳なり。大信は佛廻向の信樂なり。この旨を示さんとして『本典』行卷の終、當に信卷にうつらんとするところにこの一偈を置き、行信二卷に通ずる大精神、ひいては『本典』一部の綱要は實にこの正信偈一百二十句に籠ることをあらはす。『本典』の中心、淨土眞宗の肝要は實にこの一偈に盡くさるゝものと云ふべきなり。

題號解釋

さて上來述ぶるところの一偈の要は、その題號の上にあらはれたりと云ふべし。今その題號を釋するに二義あり。一には能信所信にして、二には安心起行なり。先づ初義を述べれば、正信とは衆生がよく信ずる能信の義なり。念佛とはこの機に信ぜらるゝ

ところの法、即ち所信なり。本文初の二句自らこの意を示す。即ち南無歸命は能信にして無量壽如來と不可思議光とは所信なり。然らば正信念佛偈とは念佛を正信するの偈と云ふ意、又は念佛に依るの正信と云ふ義なり。次に第二義は正信は安心にして往生淨土の正因、念佛はこれ報恩の起行なり。

信心正因

この二義ありと云へども要は共に他力廻向の法なることをあらはす。乃ち正信念佛偈の正信とは即ち大信にして、この信たるや佛廻向のものなるを以て従つて大行を離れざるもの、これ衆生往生の正因たり。次に念佛とは文字の當面は如來の本願を信じたる上の報謝の稱名にして、而もその體は名號南無阿彌陀佛なること言を俟たず。佛の名號そのまゝ衆生の信となり、それが口にあらはれては報謝の稱名となる。この法義をあらはすに美麗なる言辭を以てし、偈頌として讚嘆するによりこれを正信念佛偈と

一偈の組織

云ふ。こゝを以てわれ、衆生の方にありては正信最も重し。故に偈文の初にこの正信を承けて歸命南無と掲げ、終の文には唯可信等と結勸し、首尾相照應して一偈の肝要唯信の一法に歸することを知らしめたまふ。先に一偈の綱要は行信二法にありと述べたりしが、更にこれを要約して衆生の方より論ずれば即ち今宗の肝心たる信心正因の旨を述べたまふにあり。

次にその組織を見るに、句數百二十、まづ初に歸敬の意を表して一偈の宗要全く彌陀如來に歸依したるもの、表白なることをあらはし、次に今宗正依の經典たる『大無量壽經』によつて阿彌陀佛の因相果徳を讚嘆し、釋尊出世の正意を示し、後三國七祖の論釋により各祖の詮顯せんとする要義を摘出してこれを示し、最後に七祖の徳を結讚してよくその教説を信ずべしと勸めたまふ。

製作理由

因にかくの如き偈を親鸞聖人は如何なる理由を以て作りたま

廣大の佛恩を報謝す

ふやについてこれを勘考するに、この偈文は『本典』中の一部別行のものなる故、『本典』の造由を論ずれば自らこの偈の造由ともなるべし。而も今特に正信偈を造りたまふ理由のみに就ても古來三義をあげて説明せり。

一には廣大の佛恩を報謝せんが爲にして、この理由は高祖餘他の著述にも通ずるところ、淨土他力門に於ては聞信一念に往因満足するを以て、著作の功を自己出離の業因には擬せず、たゞこれ報恩謝徳の外なきなり。

こゝを以て『和讃』にもこの意を述べて

「佛慧功徳をほめしめて 十方の有縁にきかしめん

信心すでにえんひとは つねに佛恩報ずべし」

と云ひ、又

「他力の信をえんひとは 佛恩報ぜんためにとて等」

眞宗の要義を顯示す

とのたまふ。而してかくの如く信後一切の行動はみな佛恩報謝の營みなり。

二に淨土眞宗の要義を顯示し、一宗の教相をあらはさんが爲にして、『大無量壽經』の宗教、他力眞宗の正意たる行信を獲れば往生の證果、所入の佛土従つて成ずるが故に、その宗要を顯示せんが爲にこれを造りたまふ。

更に第三には有縁の衆生を勸導せんが爲なり。既に上の佛恩にのぞむるときは報謝のためなれば、そのまゝこれを下勸化の衆生にのぞむれば有縁を勸導せんがために造りたまふこと明かなり。

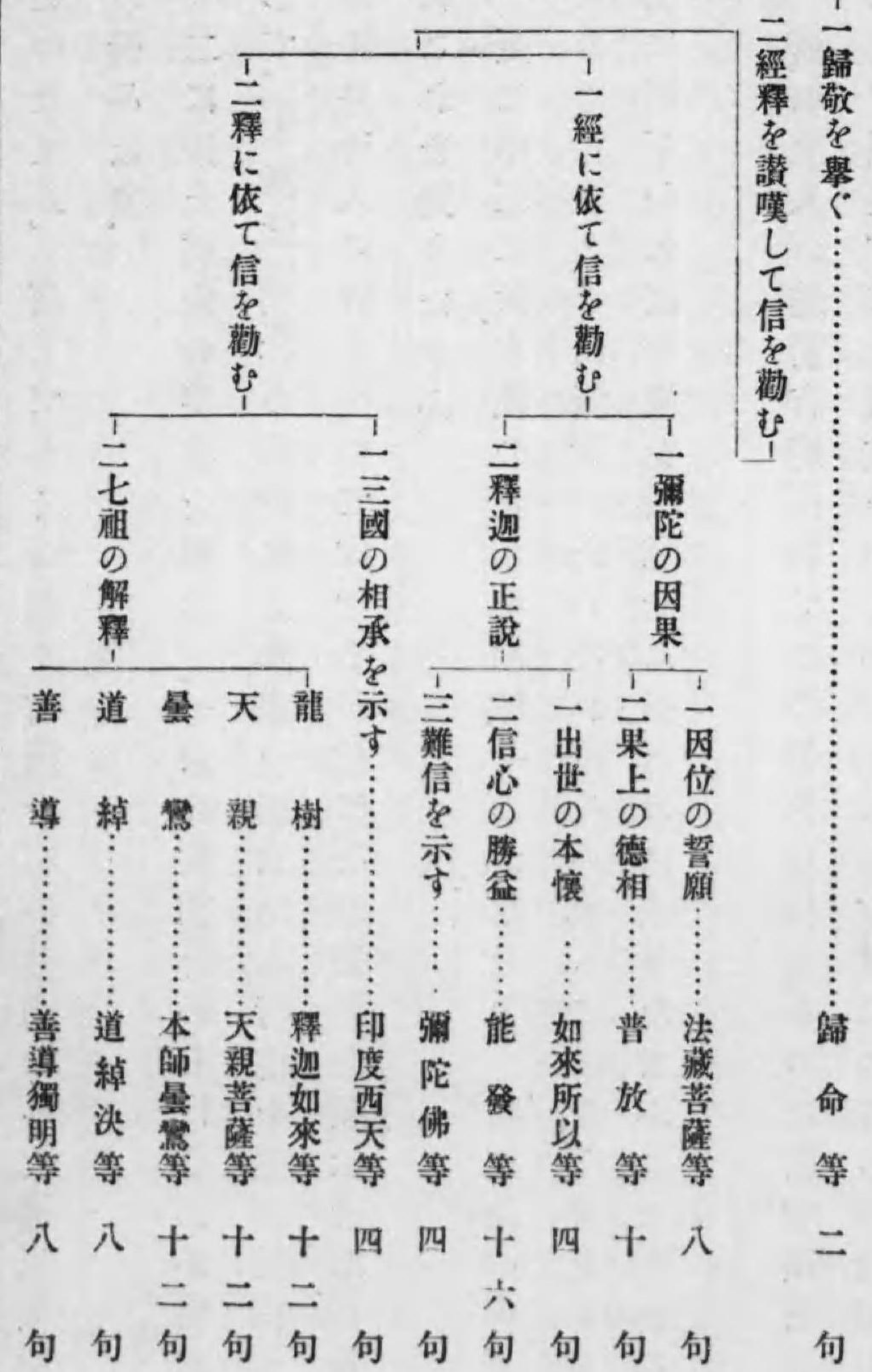
蓮如上人が越前吉崎に於てこの偈を別行し、かの三帖和讃と共に朝夕諷誦するの習慣をつくりたまふもの、實にこれらの意に添ひたまひしものと云ふべし。

有縁の衆生を勸導す

朝夕諷誦

組織圖解

〔備考〕一偈の組織を圖示すれば次の如し。



三 總結して正信を勸む…………… 弘經大士等 四 句

研究問題 (一)他力の 大行大信、(二)正信念佛偈題號の解釋、(三)正信偈造由、(四)正信偈組織の 大要

第二章 歸 敬 文

歸命無量壽如來 南無不可思議光

源 信…………… 源信廣開等 八 句

源 空…………… 本師源空等 八 句

歸 敬

一、大意 佛弟子が佛を信奉して經釋を註釋講演するに先立ち、佛を勸請してその所信を敬白することは、古來の習風なり。今高祖大師自ら深く佛徳に歸依するの旨を示し、又以下法藏菩薩等諸々の偈頌讚述はみなこの敬虔なる心より流れ出づるものなることを表し、兼て眞宗法義の根本は南無歸命の信心にあることを示す。

歸命

二、字釋 ○歸命 佛の勅命に歸依歸順することにして、高祖の『銘文』に「歸命といふは如來の勅命にしたがひたてまつるなり」と云ふ意なり。然らば歸は衆生の能歸にして命は如來の勅命なり。依て「命に歸する」と訓ずべし。然るに衆生の歸命は佛の方より信ぜしめたまふ大願力によつて起るところなれば、その本は佛の方にありと云ふべし。こゝを以て行卷にはこの字を佛の方より述べて「歸命とは本願招喚の勅命なり」とのたまふ。然らば歸命とは歸せよとの命「または歸せよと命じたまふ」と訓ずべし。而も佛の勅命に歸順したるところ直ちに衆生の歸命なれば、この二全く相離るべからず。若し聖道門にあつては、歸命は自力の歸依心なるを以て機の利鈍に隨ひ強弱淺深あり。今の歸命は唯佛の勅命に一任せる一味平等の信なるが故に、衆生の歸命そのまゝ、廣大なる佛力に歸すべく、而して今の字釋の當意は衆生の信順なり。 ○無量

如來

壽如來 無量壽とは梵語阿彌陀の譯名なり。淨土の三部經中『無量壽經』『觀無量壽經』の題號に既にこの名出たり。元來諸佛の壽命も無量なれど、そは有始無終の無量壽なるに對し、彌陀は無始無終の無量壽にして十方諸佛の本師本佛なれば、この名を以て彌陀の別名とす。如來とは梵音にして佛十號の一なり。眞如に相應して顯現せし身にして今は報身佛を云ふ。佛陀は自ら眞如の理を覺ると共に他の衆生をも救濟することの完全なる力を具備せる覺者なり。 ○南無 歸命の梵語なり。 ○不可思議光佛 上の壽命は時間的にその壽限りなきことを云ひ、今の不可思議光は空間的にその慈悲の廣大なることわれ、凡夫の心に思ふことも口に議することも不可能なるを云ふ。蓋し佛の功德は實は無量なるも、壽命と光明との二徳を擧げてこれを代表せしめ、以て衆生を救濟したまふ根本なることを示す。然らば光と壽、何れかを異名

とするに非ず、全く一佛號なり。

三、通釋 量りなき壽命と思ひ議られざる光明とを有して、われら

一切衆生を救済したまふ阿彌陀如來に歸命したてまつる。

四、研究問題 (一)歸命の意義 (二)阿彌陀の名義 (三)光壽無量

第三章 如來因位の誓願

法藏菩薩因位時

在世自在王佛所

親見諸佛淨土因

國土人天之善惡

建立無上殊勝願

超發希有大弘誓

五劫思惟之攝受

重誓名聲聞十方

「無量壽經」上云「時有國王聞佛說法心懷悅豫」等又云「於是世自在王佛即爲廣說二百一十億諸佛刹土天人之善惡國土之微妙」等又云「我至成佛道名聲超十方究竟靡所聞誓不成正覺」

法藏菩薩

因位の發願
修行

一、大意 上には果體たる佛名を擧げたるを以て續いてその因行と果徳とを述べ。今の八句はその初先づ因行を明す一段なり。

二、字釋 ○法藏 梵名は曇摩迦留と云ふ。一切の法を藏め持つて失はざるの意にして、阿彌陀佛未だ佛果にのぼりたまはざる以前、即ち因位の時の名なり。 ○菩薩 詳しくは菩提薩埵と云ふ。

菩提とは佛道、薩埵とは衆生なれば、譯して大覺有情と云ふ。自ら佛道を求むる心勇猛にして退轉なきと共に、下衆生を教化せんとの利他心強き行者なり。 ○因位 後の成佛の果に對して未だ佛とならざる菩薩の發心修行の間を指す。 ○世自在王佛 法藏菩薩の値ひたてまつりし佛なり。自ら煩惱を解脱して自在なるのみならず、世の衆生を自在に救ふ慈悲と世間を自在に知るの智慧とを得たまふよりこの名あり。世饒王佛或は略して饒王佛とも稱す。 ○親見 肉眼に見るを親と云ひ、心眼に見るを見といふ。

よく觀察すること。○諸佛淨土因。諸佛が淨土を建立したまふ業因及び衆生をしてその淨土に往生せしむるの業因の二に通ず。その因とは布施持戒忍辱精進禪定智慧の六度萬行または世戒行の三福なり。これを國土にのぞむるときは建立の因となり、人天にのぞむるときは往生の因となる。諸佛淨土を建立したまふには六度萬行三福諸善を以てその因とするが故に、その國土に往生する原因も亦六度萬行三福諸善を以てせざるべからず。法藏菩薩はこれを親見したまひ、諸善萬行を以て往生せんとする不徹底の行を捨て、名號の清淨業を選び取つて以て淨土を建立し衆生を攝取す。○國土人天。住む場所と其處に住む衆生とをあぐ。所謂依報と正報となり。○善惡。道德上の善惡と云ふよりは寧ろ勝劣妙麁の意なり。○無上殊勝願。希有大弘誓。如何なる罪業深きものも必ず救はむとの願と、若し救ひ得ざるならば我も佛とは

大弘誓

ならじとの誓となり。但しこの願とこの誓とは畢竟廣大なる佛心の一に歸するを以て常に誓願と云ふ。而して斯くの如き誓願は世に比すべきものなく、共に等しきものなきが故に無上と云ひ殊勝と説く。○超發。その志が通途に出過し諸佛に超え勝れたるを云ふ。○大弘誓。無上殊勝にして且つ希有なるが故に大弘誓と云ふ。この大に大多勝の三義を具す。法藏菩薩の誓ひたまふ四十八願は法性眞如の理に相契ふところの發願なるが故に大と云ひ、この中には無量の大願を普く攝するが故に多と云ひ、また無上殊勝となし超世願と云はるゝを以てこれを勝とす。極めてすぐれて他に比類なる誓願なり。而してこれ總じては四十八願別しては眞實五願をさす。更に要約すればこの五願を全うしたる第十八願なり。偈中眞實を取つて一宗の綱要を述ぶるが故に。○五劫。劫は梵語劫波の略にして分別時節と譯す。劫に拂石劫

重誓

と芥子劫との二種あり。要は極めて長き時間をさして云ふ。○
 攝受。受は取に同じく悪しきを捨て、善きものを攝めとること
 にして選擇攝取の意なり。○重誓。『天經』によれば法藏菩薩上に
 四十八願を建てられし上に更に偈を説いて重ねて誓をなす。こ
 れ大悲廻向の極要なり。○名聲。第十七願に誓ひたまふ南無阿
 彌陀佛の名號なり。この名號は諸佛の口を藉りて流布す。諸佛
 なきときは菩薩讚嘆し、菩薩なきときは凡夫讚嘆す。みな如來の
 加被力なり。然らば實はこの名號それ自體が絶えず常に十方に
 流布する活動體なればこれを聞十方と云ふ。而してこの名聲十
 方に聞えずんば何によりてか衆生の信を生ぜん。これ重誓した
 まふ所以なり。
 三、通釋 われら凡夫を救済したまふところの阿彌陀佛は、決して
 冷然たる理そのものにあらずして、眞實の智慧と慈悲とを具備し

願行に報ひあらはれたまへる報身佛ならざるべからず。その報
 身佛は下凡のわれらを救はむとして極めて低く又小なるところ
 より漸次築き上げたるところのものにして、その準備時代を因位
 の發願修行と云ふ。即ち法藏菩薩は師佛たる世自在王佛のみも
 とに在て、十方諸佛の淨土が建立せらるゝ因と、その國土並に其處
 に住む人天聲聞菩薩等の勝劣妙處をよく視察せられ、五劫が間よ
 く思慮分別を凝してその麁惡なるを捨て善妙なるを選び取り、以
 て一切諸佛に捨てられたる無善造惡の凡夫を救はむとの比類な
 き願をおこし、若し救はずんば我も佛とはならじてふ大なる誓を
 立て、且つ更に重ねてその救ふ行體たる南無阿彌陀佛を十方に流
 布せしめむと誓ひたまへり。

四、研究問題 (一)法藏の發願 (二)重誓したまふ所以

第四章 如來果上の徳相

第一節 佛光明照の徳

普放無量無邊光 無礙無對光炎王
 清淨歡喜智慧光 不斷難思無稱光
 超日月光照塵刹 一切群生蒙光照

「大經」上云「佛告阿難無量壽佛威神光明最尊第一諸佛光明所不能及乃至是故無量壽佛號無量光佛等」

一、大意 先に如來の因位及び發願を讚嘆せしを以て、以下佛が因位より果上にかへりたまひて、正しく衆生を救ひたまふ徳益を明す。その中普放等の六句は光明の徳を明して十二光を嘆じ、次の四句は名號の徳を明して衆生往生の因果を示す。果徳無量なれども要はこの光明名號の二徳に攝まる。今その初なり。無量無

十二光徳

邊無礙等の下皆光の字をつけて見るべし。

二、字釋 ○普放 處として照さざるところなきが故に普と云ふ。下に照塵刹と云ふものこれに應ず。放とは壽命の體より光を放つこと、然らば今の十二光は用なり。實は光明の徳は無量なるも今その一分を説いて他を攝したまふ。○無量 三世を照して限りなきこと。○無邊光 十方を照して邊際なきこと。○無礙 色心無礙、涉入無碍、相即無碍にして光明のはたらきの如何なる方面にも礙りなきこと。○無對 諸佛の光明のよくこれに及ぶものなきを云ふ。○光炎王 光明中最もすぐれたるを云ふ。○清淨 衆生貪慾の心を治してよく清淨ならしむる光明。○歡喜 衆生瞋恚の心を破つて歡喜を與ふる光明。○智慧光 衆生の愚癡を破つて無疑の眞智を與ふるもの。○不斷 常に衆生を護り、又衆生をして間斷なく因種を持續せしむる光明。○難思 凡夫

照育と攝取

の心に想ひ盡すこと能はざる光明。○無稱光 口に稱讚し盡すこと能はざる光明。○超日月光 普通世間に於てわれ／＼の眼に見る光明の最も強大なるものは太陽の光なり。然るに今彌陀の光明はそれよりも尙超えすぐれたりと喩を以て光徳を知らしむ。○塵刹 世界は無量にして塵數の如し。故に塵刹と云ふ。○一切群生 廣く六道の衆生その光明の益を蒙らざるものなし。故に一切と云ふ。○光照 佛の光明なり。而してこれを衆生よりその利益を見るときは照育と攝取との二益に分別することを得。照育は信前に於て獲信せしめむとの佛の慈悲外護の光明にして、攝取とは信後彌陀の照護を受くるを云ふ。佛光に二あるにあらず、たゞ受くる機に信前信後あるが故に光明にこの差別を立つるのみ。

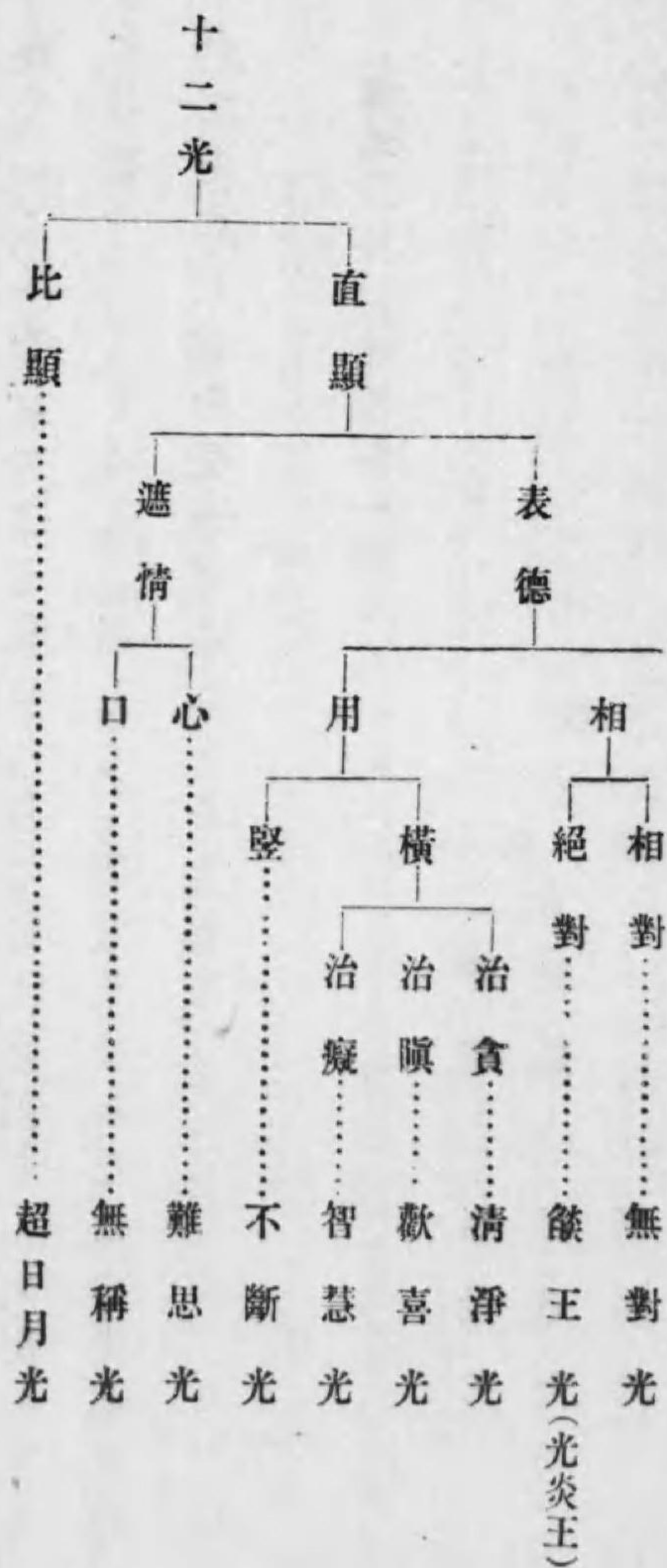
三、通釋 佛は普く慈悲の光明を放ちたまふ。その光明たるや三

世を貫ぬき十方に遍じて如何なるものにも礙へらるゝことなく、又他に對比すべきものなく光明中の最尊たるものなり。而して衆生の貪慾を破り瞋恚を治し、その愚癡心を破りて心を清淨ならしめ、歡喜せしめ、眞實智慧を與て、常に衆生を照護して絶ゆることなく、その光徳は實は凡夫の心に想ひ盡すことも難く口にも稱し難し。こゝを以てこの世界に於て最も強烈なる太陽の光もこれには敵すべくもなし。而して一切衆生はみなこの光明に照らされてその利益を受けざるることなきなり。

十二光圖解

〔備考〕 十二光圖解一覽





四、研究問題 (一)十二光義 (二)彌陀光明の益相

第二節 名號攝化の徳

本願名號正定業、成、等覺、證、大涅槃、

至心信樂願爲因、必至滅度願成就、

【散善義】云「是名正定之業」【大經】第十八願文云「至心信樂欲」

生我國「如來會第十一願文云、若不決定成等正覺、證大涅槃、不取正覺」【大經】第十一願文云「必至滅度者等」

一、大意 上に彌陀の果徳を明す中、光明の徳を顯せしを以て、この四句は名號の徳を示し、これによつて衆生往生の因果を成ずるなり。若し『大經』の願文に配當すれば十七、十八、十一の三願の法義を顯したまふと云ふべし。

二、字釋 ○本願名號 本願とは本因の誓願にして、廣くは四十八願に通ずれども別しては第十八願の別目なり。名號とは衆生往生の行體たる南無阿彌陀佛にして第十七願を指す。今本願の名號と云ふときは、本願成就の名號の意にして、第十八願の義を具へたる名義具足の尊號なることをあらはす。即ち本願の別目を第十七願に與えて本願名號とのたまふなり。○正定業 衆生往生の正しく定まる業因にしてこれに三義あり。一には正選定の業にして、佛が因中に於て衆生往生のたねとして正しく名號の一法

本願名號

正定業の三義

を選定したまへる意なり。二には正決定の業にして、本願の名號を念ずれば淨土往生の業因正しく決定するを云ふ。これ衆生信一念と同時に定まる位なり。三には入正定聚の後の作業にして、信一念直ちに正定聚に住するものが常に口に稱する報恩の作業たる念佛を云ふ。この三義中、今は第一第三義に當り、第二の正決定の業は至心信樂願爲因の句にあらはさる。而して第一第三義の中、正しくは第一の正選定の業の意にして、第三の相續作業は義として自ら具するものと見るべきなり。○至心信樂願爲因。至心信樂の願とは第十八願の名なり。第十七、第十八の兩願は必ず相關聯するもの故、上の句についてこの第十八願を置きたまふ。至心とは衆生自力の虚偽心を離れ、衆生心中に至り届ける如來の眞實心を云ふ。信樂とは名號の謂れを聞いて疑はず、信知受樂するを云ふ。本願には三信を誓ひたまへるを以て今欲生をもあぐ

十八願名

等覺

べき筈なれど、信樂中に義として具はるが故にこれを攝して別示せざるなり。衆生が如來のまことに疑晴れて、一念無疑なるところ必ず往生せしめんと誓ひたまへるが第十八願力なり。こゝを以て第十八願即三心の願なるが故に、願を因とすると云ふは願力に由つて成ずる三心なればなり。衆生がたやすく往生する所以は大願業力に由る。これを得る時節につかば信の一念にあるが故に信心正因と云ふ。たゞ衆生のおこす信と云ふも、そのもとは衆生自らおこすところにあらず、第十八願の悲心より發起するの心なるをあらはして往生の業因を語るに願をあげしなり。○等覺。具さには等正覺と云ふ。支那玄奘三藏以前の舊譯によらば等覺は佛果の名なり。『大經』の佛十號中に等正覺とあるものこれなり。又玄奘以後の新譯につかば一生補處の菩薩位を云ふ。佛の正覺に等しとの意にして、現益なれば佛果にのぞむれば覺りは

涅槃

未だ現實にあらはれず。今は現益たる正定聚の菩薩の位なり。
 ○證大涅槃 涅槃とは梵語にして、滅度と譯す。彌陀眞實の佛果を云ふ。佛の名號を信ずるものは未來必ず彌陀の淨土に往生し、如來の妙果を證る。これを大涅槃を證すと云ふ。即ち彌陀の救濟は單に一時の救にあらざり、未來永遠に徹貫せる濟度なり。故に一度如來光明の緣によつて名號を信ずれば、直ちに現世にては正定聚の菩薩位に入り、未來は安養淨土の大果を得るなり。○必至滅度願 第十一願の名にして、一切衆生を必ず涅槃の證果たる滅度に至らしめむとの願なり。現生に於て正定聚の位に入りしものは、未來必ず眞實佛果たる滅度の證を開くことを示したまふ。
 三、通釋 佛因位の本願は、一切衆生を必ず救濟せむとの誓なるが、その誓願の本體たる南無阿彌陀佛の名號は、われ／＼衆生が西方淨土に往生することを正しく定めたまふ根本なり。斯くの如き

名號なるが故に、その謂れを聞いて信ずる時、現生に於ては菩薩の最上位たる等覺の數に入り、未來淨土に於ては眞實佛果を證得す。これ全く如來の方に第十一願が成就せられたるを以てなり。
 四、研究問題 (一)正定業の義 (二)至心信樂の願の釋名 (三)信獲得者の現當二益 (四)正定滅度

第五章 釋迦の正說

第一節 出世の本懷

如來所以興出世シタマフニ 唯說彌陀本願海
 五濁惡時群生海 應信如來如實言

『大經』上云「如來以無盡大悲於哀三界所以出興於世光闡道教欲拯群萌惠以眞實之利」

一、大意 上に彌陀如來の因位及び果上の徳を述べ畢りたるを以

て、以下これを此世の中に説き弘めたまへる釋尊の正説を示す。その中初の四句は釋尊の世に出でたまひし根本精神は全く彌陀法にあることを顯示す。

二、字釋 ○如來 總じては三世の諸佛に通じ、又別しては釋迦如來をさす。 ○興出世 興起出現にして、この世に生れ出でたまふこと。 ○唯説 釋尊は一代説法五十年中、種々の法を説示せられたれども、その本懷はたゞ一なるのみと、他を簡ばむがために唯の字を用ひたまふ。 尙唯の字を詳しくするに三義あり。 一に簡持の義、二に決定の義、三に顯勝の義なり。 簡持とは聖道門に簡んで本願眞實を説くが故に。 決定とは釋迦出世の本意は定んで『大經』のみなるが故に。 又顯勝とは釋尊の説きたまふところの彌陀の本願は最も勝れたるが故に。 かくの如きの義をあらはして唯説とのたまふ。 ○彌陀本願海 本願とは眞實五願を全ふするとこ

唯の字の意義

大經の出世本懷

法華經の出世本懷

ろの第十八願なり。 彌陀の第十八願は廣くして涯なく、深くして底なきが故に海に喩へて本願海と云ふ。 而して釋尊が何故これのみを説くを以て出世の本懷としたまふことを知るやと云ふに『大經』の初に「道教を光闡し、群萌を拯ひ恵むに眞實の利を以てせんと欲す」と云ひ、これをその經末の文に参照するに阿彌陀佛の誓願を説き弘むるが即ち眞實の利を惠ませたまふこと、知る。 聖道門の諸教たる道教は、佛これを説きたまふと云へども、敢てこれを以て群生を徹底的に救濟せんと欲せられしにはあらず、たゞ方便施設たるのみ、眞實の利たる彌陀誓願を惠み與へてこそ眞に群生を濟度せんとせられしなり。 『法華經』にも出世本懷を説けども、彼はたゞ一應聲聞緣覺の成佛せざる方便教に對して、二乗も成佛すと教ふる眞實教なるを以て出世本懷經とも云ふべし。 されど再應の絶對門より語るときは、機の利鈍を問はず、一切衆生残らず往

生成佛することを説く『大經』こそ眞實の出世本懷經なり。されど高祖が出世本懷を示したまふは必ずしも他宗の所談に對せんとのみにはあらず、我等凡愚も眞實の利たる彌陀の妙法に遇ふこと何の慶びかこれに如かんやと、歡喜のあまりかくの如くの如く唯彌陀の本願海を説くが如來の世に興出したまふ所以なりと明したまふなり。○五濁 この言『小經』に出でたり。一に劫濁、二に見濁、三に煩惱濁、四に衆生濁、五に命濁にして五の濁りに充たされたる此世の有様を云ふ。○惡時 造惡不善の末法濁世なり。○群生海 衆生海と云ふに同じ。衆生は煩惱深く生死窮りなし。且つその數無量無邊なるを以て海にたとへて群生海と云ふ。○如來如實言 如來とは釋尊なり。如實の言とは虚偽なき眞實説なり。彌陀の第十八願を説くは方便に非ず、まことの教説なるを以てなり。

三、通釋 廣く云へば一切諸佛、これを狭く云へば釋迦如來が此世に生れたまひ、種々の法門を説きたまふと云へども、その本意は唯阿彌陀佛の廣くして深きこと海の如くなる第十八願の旨を説き弘めむが爲に世に出でたまひしなり。こゝを以て五濁末代に生れたる煩惱罪濁のわれら凡夫は、皆悉くこの釋尊出世の本懷たる眞實彌陀法を信奉せざるべからず。

四、研究問題 佛出世の本懷

第二節 信心の勝益

第一項 同一味の益

能發一念喜愛心 不斷煩惱得涅槃
 凡聖逆謗齊廻入 如衆水入海一味

『如來會』第十八願成就文云「能發一念淨信歡喜愛樂等」『論註』
下云「不斷煩惱得涅槃分」『安樂集』上云「位該上下凡聖通住」

一念の解釋

一、大意 先に釋尊出世の本懷は唯彌陀の本願を説かんがためなることを明せしかば、以下本願を信ずるもの、受くる利益を明す。四句の中初二句は果の一味をあげ、後の二句は因の一味をあぐ。
二、字釋 ○一念 一念とはもと『大經』に出たり。これについて信の一念と行の一念とあり。信の一念とは信心を領得せし一念を云ひ、行の一念とは信後に稱ふるひとこゑの念佛について云ふ。信の一念に就ても亦兩義ありて、その時尅について云ふときは最初ひとおもひの信心の意となり、信相について云ふときは二心なき信心の意となる。今は信の一念にして本願名號を信受する當體を云ふ。これ報土往生の眞因なり。法然上人は聖道門・淨土門を相對して萬行を廢し念佛を立てんとせらるゝが故に、一念を解

不斷煩惱

釋するに當つて常に行の一念としたまふ。これ高祖大師と釋相の異るところなり。○喜愛心 自己の往生の一大事に疑晴れて歡喜愛樂する心なり。實は初發の信心なれど、そのところに必ず義として歡喜の心を攝し、これが後續にのびゆくときははうれしさの稱名相續となるが故に一念の信のところに喜愛心の名を付して一念喜愛心と云ふ。○不斷煩惱 煩惱とは心を惱まし煩はす精神作用にして、その數は無量なれど通常これを貪慾・瞋恚・愚痴の三毒とす。多くの心の穢濁はみなこの中に攝せらるゝを以てなり。これを斷ぜずして而も涅槃を得ると云ふは、凡夫の自力心を以ては斷ぜざれども、彌陀願力に依つて凡夫そのまゝ、眞實報土に往生するを云ふなり。彼の『維摩經』にも「不斷煩惱而入涅槃」と説けども、彼れは煩惱菩提その體無二なる理論より出發してこれを談じ、煩惱も悟ればそのまゝ、涅槃、本來寂滅なりと云ふ通途の釋にし

て、今の所談とは大いに趣を異にす。絶対他力門に語るところは不斷と云ふも凡夫の力を云ふ邊にはあらずして、全く願力によることをあらはす。○得涅槃。佛果菩提を得ること、これを涅槃分として現生に得る正定聚の益となすこともあれど、今は正しく未來淨土に得るところの當益とす。○凡聖逆謗。凡とは愚鈍の凡夫にして出離の期なきもの、聖とは智徳すぐれ佛道修行に堪へ得る人、逆とは五逆の大罪人、謗とは謗法者にして、佛を謗り法を無視するを云ふ。○齊廻入。齊に齊上と齊下とあり。齊上とは淨土に生るゝには實は修行功成りし聖者ならざるべからず。然るに今彌陀願力によりて下劣の凡夫がこの聖人と齊しくなりて往生するを云ふ。齊下とは如何に修行を積み重ねし菩薩と云へども、彌陀の淨土に往生するには總て下劣の凡夫と位を齊しうして往生す。廻入とは廻心歸入なり。要するに皆齊しく自力を棄て彌

齊上齊下

一味の二義

陀願力に乗ずるが故に齊廻入と云ふ。○衆水入海一味。衆水とは凡聖逆謗諸機の差別を喩ふ。海に入るとは功徳の大寶海即ち名號法徳中に歸入するを喩ふ。この歸入一味に二義あり。一には現生に於ては凡聖逆謗皆本願大悲智慧眞實に齊しく入るを云ふ。二には證入一味にして、現生一味の信徳に依り報土に往生して、涅槃平等の一味を得せしむ。即ち因一味の故に果も亦一味にして、これ今宗不共の妙談なり。

三、通釋。衆生の心によく一念佛願を信じ喜ぶ心のおこるとき、衆生は自ら煩惱を斷ぜずとも、佛願力によつて罪障のまゝ、未來必ず佛果菩提の果を開くことを得。而して斯くの如き利益を得るは、凡夫聖者五逆謗法の如何なるものをも論ぜず、齊しく自力心をひるがへして佛の大慈悲に歸すれば、諸の河水の海に入りて同一鹹味となる如く、みな同じく淨土に往生して即成佛の證を開くなり。

四、研究問題 (一)一念の釋義 (二)不斷得證の理由 (三)平等利益

第二項 心光常護の益

攝取心光常照護シタマン

已能雖モスト無明闇カ

貪愛瞋憎之雲霧ハ

常覆ヘリ眞實信心天ニ

譬如日光覆ハレドモ雲霧ニ

雲霧之下明無闇カ

「觀經」云「光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨」觀念法門
云「但有專念阿彌陀佛衆生被佛心光常照是人攝取不捨」

一、大意 衆生の領得せる信心の益をあぐる中、上は當來の利益をあげしが、今の六句は佛の光明が常に信心の人を照し護りたまふが故に、信獲得の行者は假令貪慾瞋恚の煩惱おこると雖も障礙あることなしと現益に就て明したまふ。

二、字釋 ○攝取 具さには攝取不捨と云ふ。佛力により往生を

色心二光

無明

決定してその光明に護られ永く異變なきを云ふ。○心光 信心の行者は佛心に相應するが故に、その心光に照護せられて往生に退轉なし。然るに自力疑心の行者はたゞ佛色光の一分を被るのみ。これ佛の方より隔別して色心の二光を分つにあらず、色心不二の光明を以て常に一切のものゝ上を照したまへども、疑心は佛心に背くが故に機の方より隔別して色光の一分を被ると云ふのみ。宿善開發して信心決得するとき、今まで受けし色光の外に別に心光を放ちたまふにはあらず、そのまゝ心光照護の益を被ることゝなる。然らば他力念佛の行者は色心不二の光明に照益せらるゝものなるも、高祖は多くは信心の行者は心光の益を受くるとのたまふ。○常照護 間斷なく照したまふ故に常と云ふ。不斷光の利益なり。○無明闇 無明に二義あり。一には眞如に明了ならざる愚痴心を云ひ、二には佛智に明了ならざる疑惑心を云ふ。

今は後者の意なり。疑惑の行者は未來出離の要路全く闇黒なる故、これを喩について無明の闇とのたまふ。○貪・愛・瞋・憎。貪り惜む貪慾の煩惱と、怒り憎む瞋恚の煩惱。○眞・實・信・心・天。凡夫の心は假令信獲得の後も常に煩惱に満ち亘ると云へども、如來の本願眞實を信ずる故、その眞實が信心の體となる。こゝを以て眞實信心と云ふ。天は清淨眞實を喩へて云ふ。○明・無・闇。信心の利益は煩惱のために障へられて往生を退失すると云ふことなきを云ふ。即ち吾人は信一念の時、佛力に由つて本願を疑ふ心は絶ゆると云へども、有漏業によつて受けたる今の身體を未だ存續するが故に、生涯煩惱は盡くることなし。而も往生には退失なきなり。

三、通釋 必ず攝めとつて捨てたまはざる阿彌陀佛悲智圓滿の御心より放ちたまふ光明は、常に信心の衆生を照したまふ。信心を獲得せし人は假令本願を疑ふ心去ると云へども、貪慾瞋恚(愚痴)の

煩惱はなほ雲霧の如く常に信心の天を覆ふ。されどそれは恰も日光が雲霧に覆はれながら下界はなほ闇とならざるが如く、衆生の往生成佛に就ては一切の煩惱は少しも障礙とはならざるなり。

四、研究問題 (一)色心二光 (二)無明の解釋

第三項 迷界超出の益

獲信見敬大慶喜

即橫超截五惡趣

「大經」下云「聞法能不忘見敬得大慶」同下云「必得超絕者」
 往生安養國橫截五惡趣惡趣自然閉

一、大意 上に攝取光明の利益を明したるについて、迷界惡趣を超出するが信心の利益なることを示したまふ。而して「經」には「安養國に往生すること」をうればとありて正しく未來にうくる當得なれど、いまこの偈文には特に「即」の字を加へ、これを聞いて信ずる一

念の現益とせられたり。蓋しこれ入正定聚の利益とせられたるが故なり。

二、字釋 ○見敬 上に能發一念喜愛心と云ふ。信一念のところ
に喜びの心相應す。この相應せる慶喜心が自ら延びて相續する
ところを見敬大慶喜と云ふ。現世に於てうち喜ぶなり。これに
ついて二説あり。一は眼見にして畫像等を見て敬重すること。

二は心見にして法體の名義衆生心中に入るとき疑闇急ちに消え、
淨土往生の道分明なるを見と云ふ。前義も妨げなしと云へども
今正しくは後義なり。○大慶喜 信心獲得の上は迷の苦患を離
る、故、信の義別として必ず歡喜の心あり、これが後に悦びの相續
としてのびゆくなり。今は初起信心の義別にして信心と云ふに
同じ。○即 即について同時即と異時即との二ある中、今は同時
即にして、時を隔てずして同時に得るの意。○横超截 自力の修

慶喜心

二雙四重判

行によつて悟るを豎とするに對し、願力に依つて往生し、階次を経
ずして直ちに生死界の縛を截つを横と云ふ。高祖は特に横超の
二字を以て他力眞宗の本意としたまひ、二雙四重の判をたてたま
ふ。○五惡趣 人間界天上界の二に地獄・餓鬼・畜生の三惡趣を加
へて五惡趣と云ふ。これらの五界は皆それ〴〵の業によつて趣
くところなれば趣と云ふ。人間界と天上界とは他の三惡趣に比
すれば幾分は善處と云ふべきも、涅槃に對すれば齊しく惡趣なれ
ば今總じて五惡趣と云ふ。

三、通釋 衆生信心を獲て心に佛のまことを全領し、大悲の尊とさ
をうち慶ぶ人は、信一念と同時に迷の世界たる五惡趣を截ちこえ
て、彌陀の淨土に往生するの利益を得るなり。

四、研究問題 横超の義趣

第四項 諸佛稱讚の益

一切善惡凡夫人 聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者 是人名芬陀利華

〔玄義分〕云「一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲增上緣」觀經云「若念佛者當知此人是人中芬陀利華」

一、大意 信心の勝益を明す中、第四に諸佛殊に釋迦如來が信心の行者を稱讚したまふことを示す。

二、字釋 ○善惡凡夫人 善惡と云へどもその本意は惡機にあり。下に惑染凡夫と云ひ、一生造惡と云ひ、極重惡人と云ふもの、皆凡夫惡人を本としたまふ意なり。 ○聞信 本願の謂れを聞いて信ずること。 『天經』に「聞其名號信心歡喜」と云ふものこれなり。 ○如來弘誓願 如來とは阿彌陀如來なり。 弘誓願とは如何なるものを

も弘く救はむとの第十八願なり。 ○廣大勝解者 勝解とは殊勝に領解せし人のこと、これに廣大の二字を加ふるものは凡夫自力の領解にあらず、凡夫の心につけば常に妄念妄執のみなれば廣大勝解とは云ふべからずと云へども、佛の方より見れば信徳として煩惱即菩提、生死即涅槃に住せしめたまふ。こゝを以て如來の本願力によつて得しところの名なることをあらはす。 ○芬陀利華 白蓮華を云ふ。佛一代諸教の中に、佛及び所説の法を蓮華に喩ふるものあるを見るも、人をこの花に喩ふるものなし。然るに今信心の行者を芬陀利華と云ふものは、南無阿彌陀佛にまるめとられたるものなるを以て、佛と同じくこの名を用ひ稱讚したまふ。 三、通釋 凡夫の善惡をとはず、如何なるものも如來廣大の第十八願の謂れを聞いて信ずるものに對して、諸佛殊に釋尊は廣大勝解の人と褒め、又人中の白蓮華なりと嘆へられたり。

第三節 難信と勸誠

彌陀佛、本願念佛、
信樂受持甚以難

邪見憍慢、惡衆生
難中之難無過斯

『大經云、憍慢弊解、難以信此法』又云、若聞斯法、信樂受持、難中之難、無過此難

一、大意 前に信心の得益をあげしを以て、今この四句は疑の根本たる邪見憍慢の心をあげ、斯るものは彌陀法を信じ難きが故に宜しく心をひるがへして如來の法を信ずべしと勧めたまふ。
二、字釋 ○本願念佛 第二十願の自力念佛に簡び、上に明すとこの第十八願横超の本弘誓願を云ふ。 ○邪見 因果の道理を無視する見解にして、ものゝ真相を了知せざるなり。 ○憍慢 自己を誇り他を侮蔑するもの、即ち信機信法なきものなり。 ○信樂

難信三法

佛の本願を信じて深く愛樂すること。 ○受持 領納して忘れ失はざること。 ○難中之難無過斯 『經』の中には難について五難を説く。その中前の四難は聖道の值佛聞法等の難なり。第五難は本願信樂の難なり。如何なる者も宿善開けざれば聞くこと能はず、故に難と云ふ。然るに經に難と説くは法の勝れたるを示す。今はこれを轉用して邪見憍慢等の機を誡め、それらをして廻心懺悔し、自ら自力の心を改めしむるなり。
三、通釋 佛出世の本懷たる彌陀の本願を信樂すれば大利益を得るも、邪見憍慢の惡衆生にあつてはこれを信じ愛樂すること極めて難く、これに超えたる難なし。こゝを以て邪見憍慢の輩は速に廻心懺悔し、以てよくこの法を領受すべきなり。
四、研究問題 彌陀法を難信と説く理由

第六章 三國高僧の相承

印度西天之論家

中夏日域之高僧

顯大聖興世正意

明如來本誓應機

一、大意 上來經に依つて淨土眞宗の法義を讃述せしが、以下三國相承の七祖にわたり、よく釋迦彌陀二尊一致の正意を顯し濁惡の劣機をすゝめたまふことを明す。これを以て上來の所説を依經段とするに對し、これより以下を依釋段と云ふ。

三國高僧

二、字釋 ○印度西天 印度は支那日本よりも西にある國と云ふより西天と云ふ。○論家 論をつくりたまふ高僧にして、龍樹天

親の二菩薩を指す。○中夏 支那を云ふ。支那の人自ら國を褒めて用ふる語なり。○日域 日本の國なり。日の出づる國の意。

○高僧 名徳高き出家にして、支那に於ては曇鸞道綽善導の三師

出でたまひ、日本に於ては源信源空の二祖出世したまふを云ふ。

○大聖 大聖人にして、印度に出現したまひし釋尊なり。○興世

正意 この世に出でたまふところの本意にして、先に示すところ

の出世の本懷なり。○如來本誓 如來とは阿彌陀佛なり。本誓

とは四十八願中別して根本王本願たる第十八願を指す。○應機

聖道門の法が末代下劣の機に効果なきに對し、淨土一門の法はよ

く萬機に普く益を被らしむるを云ふ。

三、通釋 印度に出で、論をつくりたまへる龍樹天親の二菩薩、又

支那に出でたまひし曇鸞道綽善導の三師、並に日本出現の源信源

空の二高僧等、三國の七祖相ついであらはれ、釋迦佛の世に出でた

まひし本意をあらはし、彌陀如來の第十八願は、よく末代劣機のわ

れらに相應せる妙法なることを明かにしたまふ。

〔備考〕 七祖の選定並にその顯揚

七祖選定

七祖殊勳

高祖聖人が七祖を選定したまひし理由については、古來三義を立つ。一に自ら他力本願を信じ、他人にも亦これを勧められしこと。二に廣く後世のために彌陀法を説き明せる著述を遺したまふこと。三に他力本願を相承せられしこと。而して今の七祖は皆この三條件を具備したまふ。その各々の著したまふ述作、並によく發揮したまひし殊勳の項目を示さば次の如し。

- 印度
 - 第一祖龍樹……『易行品』をあらはし、難易二道を分ちて衆機をして難行聖道門を去り、彌陀本願念佛の易行道に入らしめたまふ。
 - 第二祖天親……龍樹の易行道の法門をうけ、『淨土論』を著して一心歸命の信心を力説したまふ。
 - 第三祖曇鸞……『淨土論』を註釋して『往生論註』をつくり、一心歸命の信心が他力廻向なることを明かにし、且つ又『讚阿彌陀佛偈』を著してこの深法を讚嘆したまふ。
- 支那
 - 第四祖道綽……『安樂集』を著して一代佛教を聖道、淨土の二門に分

- 日本
 - 第五祖善導……『觀經』の疏たる『玄義分』『序分義』『定善義』『散善義』を著し、又『法事讃』『觀念法門』『往生禮讚』『般舟讚』等をつくつて廣く凡夫の爲の經意を明かにしたまふ。
 - 第六祖源信……『往生要集』を著して專修と雜修との得失を明し、報化二土を辨立して、往生極樂の教法のみ濁世末代の肝要なる旨を顯したまふ。
 - 第七祖源空……『選擇集』を著して信心と疑惑とを決判し、念佛往生を勧めたまふ。

四、研究問題 七祖の選定

第七章 龍樹菩薩

第一節 釋尊の豫言

釋迦如來楞伽山ニオイテ 爲衆告命南天竺ニシテ

龍樹大士出於世
宣說大乘無上法

悉能摧破有無見
證歡喜地生安樂

「楞伽經」第九云、於南天竺中有大德比丘名龍樹菩薩能破有無見爲人說我法大乘無上法證得歡喜地往生安樂國

一、大意 上に三國の七祖が次第に相承したまふことの概略を述べたりしを以て、以下七祖の各々について詳しくそのあらはしたまふところの釋義を述べたまふ。初十二句は第一祖龍樹菩薩に就てその教へたまふところを明す。その中初六句は釋尊が「楞伽經」の中に龍樹の出世を豫言したまへることを記し、以て菩薩の高徳を稱嘆したまふ。かくの如き佛の豫言を懸記と云ふ。
二、字釋 ○楞伽山 印度の南海岸にある山の名にして、釋尊はこの山に於て「楞伽經」を説きたまふ。○告命 佛が告げたまふこと。經文には正しくは大慧菩薩に告ぐと云ふ。されどそれが直ちに

龍樹菩薩

有無の二見

その説法の座に在る大衆に告ぐること、なる故、今衆の爲に告ぐと説く。○龍樹 梵名那伽樹那、また龍猛とも譯す。佛滅後七百年頃(西曆第三世紀頃)南印度婆羅門の家に生る。その出世年代に關しては古來種々異説の存するところ、或は龍樹二人説などその歴史的事實に就て諸説紛々たり。されど最も普通に云はるゝところに従へば、青年時代は極めて放縱なりしも、後佛教に歸してその才能をよく發揮すると云ふ。著書極めて多く、教ふるところ廣ければ後世八宗の祖師と崇めらる。その中淨土教に關する著述としては「十住毗婆沙論」「十二禮」等あり。○大士 大菩提心を持つ人の意にして菩薩のこと。○有無見 誤謬の說にして、これを要するに四句あり。有見無見亦亦無見非有非無見更に要約すれば有無の二見となる。有の見とは萬象の實有を固執するところの常見にして、人間は未來同じく人間としてその果報を續け、畜

大乘小乘

生は畜生としてその生を存續すと云ふもの、無の見とは萬物の空無を固執する斷見にして、生物も死する時は全く滅無に歸すると云ふ。これらはかの婆羅門教の一派の教ふるところ、皆佛教の正理に違背せる邪説なり。○大乘無上法。他力淨土の法門を指す。佛教に大乘小乘あり。乗とは運載の義にして、佛の教法は衆生をして迷より悟に導き運ぶを以て乗と云ふ。これに就て唯利己的念慮を以て自己一人の救濟を願ふものを小乗と云ひ、自他共に迷を離るゝ教法を大乘と云ふ。淨土念佛の一法はこの大乘法にして、中にもその最も勝れたるものなるが故に大乘無上の法と云ふ。○歡喜地。菩薩の階級に十住・十行・十廻向・十地等覺妙覺の五十二位あり。その中第四十一位即ち十地の初に至れば不退の位となり、再び下位に退墮することなく、必ず菩提を究竟することを知り、菩薩この位を得れば心に大歡喜心を生ず。依つてこの位を歡喜

歡喜地

地と云ふ。この位には菩薩の修行を多年積まざれば容易に達すること能はず。然るに如來廻向の名號を獲得して信心に安住するものは心に歡喜多きが故に親鸞聖人はこれをも歡喜地と名づけ、信一念の時の入正定聚の現益と菩薩十地の初歡喜地とを同様に嘆釋したまふ。此義より今龍樹菩薩を證歡喜地生安樂と讃仰したまふ意を見るに、龍樹菩薩は既に修行の功成りて菩薩歡喜地を證得せられたる聖者にして、而も尙往生安樂を願はれしことを讚嘆したるものなるも、同時にかくの如き高德の菩薩もまた佛陀の本願に歸命して安樂國に生れたまふと嘆ぜられしものとも見るを得べし。かくの如き殊に菩薩の位を示し、以てわれらをして難を捨て易につかしめんと勧めたまふなり。○安樂。彌陀西方淨土のことにして、身にも心にも憂なく、快樂極りなき故亦極樂とも云ふ。龍樹菩薩安樂國に生れたまふもの、その最後の望みどこ

ろは此處にあり、その本心念佛にあること、以て知るべきなり。
 三、通釋 釋尊ある時楞伽山に在して大衆の爲に『楞伽經』を説かる。その時人々に告げたまふに、今より後若干時を過ぎて南天竺に龍樹菩薩出世し、正理に違反せる常見斷見を打ち破り、大乘無上の法たる第十八願念佛の一法を説き述べ、自らは菩薩初歡喜地の位を證得し、彌陀安樂淨土に往生するならむと。龍樹菩薩は實にこの釋尊の豫言即ち懸記に應じて出世したまひし高德の大士なり。
 四、研究問題 歡喜地の解釋

第二節 難 易 一 道

顯示難行陸路苦^{レキコトヲ}

信樂易行水道樂^{レキコトヲ}

『易行品』云、佛法有無量門、如世間道有難有易陸路步行則苦水道乘船則樂。

一、大意 龍樹菩薩の教義を述ぶるや、初に『易行品』に示されたる難

難行

易二道の判を明す。

二、字釋 ○顯示 顯露にさとし示すこと。 ○難行 これに二義あり。 一に難の行にして自力諸行の行體が險難なること、二に行じ難しと訓じ、自力の諸行は修行するに困難なるの意。 二義ありと云へども意は一致に歸す。 諸佛稱名は一應易行とは名づくべきも、これを彌陀易行に比すればなほ難行中のものなり。 ○陸路苦 『易行品』には歩行の言あり。 而してその難なる所以として諸久墮の三難ありと示す。 諸の行を修し、時間を久しく費し、なほ退墮する懼れあるなり。 ○易行 平易なる行にして、彌陀の本願を信じ念佛に依つて往生することは他力に由るが故に極めて易き方法なり。 念佛は行ぜらるゝ行體につくと、能く行ずる行相につくと、その何れも易き行なること、前の難行に准知すべし。 而してこの易行は行と行と相對して談ずるときは稱名行にて不退に至

易行

ると説き、更にその本を論ずるときは他力不思議の信心に歸す。稱名行と云ふも自力の稱功を云ふにあらず、稱名の體は信心と同じく名號なれば、他力の稱名は法體全現せるもの、依つて所行にいても易行と云ふなり。○水道樂 『易行品』には乗船の言あり。自ら游泳するに非ざるが故なり。『易行品』中の易行とは廣く諸佛に通ず。然るに易行に眞實の易行と權假の易行とあり。その眞實のものは彌陀選擇の本願なり。龍樹菩薩は『華嚴經』を釋しながら善巧を以て自らこれを奪ひ、彌陀の選擇本願をあらはして濁世の凡愚をして念佛により成佛せしめんと示したまふなり。龍樹菩薩は八宗の祖師として各宗にこれを尊崇すと云へども、これを淨土眞宗より見るときは、菩薩最後の願望は實に淨土門彌陀他力易行にありしものと云ふべし。

三、通釋 龍樹菩薩は『華嚴經』を註釋せられ、その十地品の解釋たる

『十住毘婆沙論』の第九『易行品』に於て、釋尊一代の教を難行・易行の二道に分判したまひ、自力聖道の難行道は困難なる修行にして、自ら險難なる陸路を歩行するが如く、われら凡夫の到底なし能ふところには非ず、他力淨土の易行道こそ凡夫の往生を彌陀佛力に全托するが故に、乗船して海を渡るが如く極めて易し。こゝを以てわれらは易行道たる彌陀本願念佛を信じて、佛力に依り往生すべきなりと勧めたまふ。

四、研究問題 難易二道の鴻判

第三節 信因稱報

憶念彌陀佛本願 自然即時入必定
 唯能常稱如來號 應報大悲弘誓恩

『易行品』云「人能念是佛無量功德即時入必定是故我常念」

一、大意 先に難易二道を示し、易行道たる彌陀念佛を信ぜよと教へたるを以て、それに續いてこゝに信心を獲得することに由つて佛因究竟す。故にその後の念佛は佛恩報謝行なることを示し、かくて易の易たる所以を示す。

憶念義意

二、字釋 ○憶念 憶は憶持にして念は明記不忘なり。高祖聖人『唯信文意』に「憶といふは信心まことなるひとは本願をつねにおもひいづること、ろのたへずつねなるなり」と仰せられしは信心の相續について述べられしものなり。然るに今は次に即時と云ふを以て初起の信一念を指す。『信卷』末に「憶念即ち是れ眞實の一心なり」とのたまふもの即ちこの意なり。多くは後續に用ひらるゝ憶念の文字を特に初起の信を示すときに用ひられしものは、これ他力の信は初後不二なることをあらはさんがためなり。○彌陀佛本願 第十八願なり。上の彌陀佛本願念佛と云ふものこれなり。

自然の二義

○自然 自然に二義あり。一に無爲自然、二に願力自然なり。無爲自然とは涅槃の異名、願力自然とは衆生自力の計ひによらず、佛力よりなさしめたまふことをあらはす。今は後義なり。この二字中間にありて上の憶念するも下の必定に入るも共に願力自然のなさしめたまふことを明す。○即時 同時即にして信獲得と同時に時間を隔てざること。○必定 必ず佛果に至るものと決定する位にして、これを正定聚とも云ひまた不退轉とも云ふ。○唯能常稱等 稱名報恩を示す。これ今宗の常教なり。聞信の一念に往生の正因決定すれば、その後の稱名は必ず報恩なること理明かなり。かくの如き信因稱報の句此處にありて下六祖皆この義は動かすべからざることあらはす。○大悲弘誓恩 大悲即弘誓なり。廣く云へば四十八願、略すれば眞實五願、更に約むれば第十八願なり。稱名が何故報恩行になるやと云ふに、法を傳へて

稱名報恩

衆生を利益し、以て佛の本願を弘むるが故なり。但し弘願行者の報佛恩の稱名と云へども、自力の功力を以て法を弘むるにあらず、全く如來の行を行ずるものなるが故に諸佛の稱名と位を同じくして往生の因に擬することなく、唯是れ報恩の作業なるのみ。

二、通釋 彌陀如來絕對他力の易行本願を信ずれば、信の一念と同時に正定聚の位に入り、未來必ず佛果を證得することに決定す。その上は信の行者の行業としてたゞ嬉しさのあまり口に稱名を稱へて廣大なる佛恩を報すべきなり。

四、研究問題 (一) 憶念の義相 (二) 信因稱報の義趣 (三) 稱名が報恩行となる所以

第八章 天親菩薩

第一節 造論指導

天親菩薩造論說
依修多羅顯眞實

歸命無礙光如來
光闡橫超大誓願

〔淨土論〕云「我作論說偈又同云世尊我一心歸命盡十方無礙光如來」

天親菩薩

一、大意 第一祖龍樹菩薩につき、第二祖天親菩薩の勳功をあぐるについて以下十二句あり。その中先づ初四句は菩薩が『淨土論』をつくりて眞實をあらはすことを示す。

二、字釋 ○天親菩薩 梵名を婆藪盤豆と云ひ、また世親とも譯す。佛滅後九百年頃(西曆第五世紀頃)北天竺に生れたまふ。その事蹟は『世親傳』『西域記』等に出たり。○造論說 天親菩薩は著述極めて多く、世に千部の論師と稱せらる。今は『淨土論』を造られしことをさす。○歸命 佛の勅命に順ふところの信心にして、論に宣ぶる一心歸命なり。○無礙光如來 詳くは盡十方無礙光如來と云

無礙光如來

ふ。衆生の煩惱惡業に礙へられざる彌陀の攝取不捨の光明を無礙光と云ひ、この佛を無礙光如來と云ふ。信心が惡業煩惱に礙へられざるは全く無礙光の佛徳の然らしむるところなり。○修多羅・梵語にして翻譯して經と云ふ。今は淨土の三部經を云ひ、正しくはその中『大經』を指す。○眞實 『淨土論』に明すところの淨土の三種莊嚴をさす。その體を云へば名號の一法なり。即ち弘願一乘法を眞實と名づく。○光闡 廣く開き示すの意。○横超大誓願 第十八願他力の本願なり。

三、通釋 第二祖天親菩薩は『淨土論』をつくりてその教を説き述べたまふ。即ち先づ自ら盡十方無礙光如來を深く信じたてまつり、また淨土の三部經殊に『大經』に依つて弘願の一法を顯し、横超他力の本願を廣く説き示したまふ。

第二節 一心の顯揚

廣、由本願力、廻向。

爲度群生、彰一心。

〔淨土論云〕以本願力廻向故又同云世尊我一心

一、大意 『淨土論』に明すところの教義を示す中、先づこの二句は他力の一心を顯すことを示す。他力行者の獲たる信はこれ本願力廻向の一心なり。こゝを以て隨つて他の衆生をも濟度せんとの悲心もおこる。

二、字釋 ○廣 普く一切衆生のために。○本願力廻向 衆生の信心を獲得するは佛第十八願の慈悲心より發さしめたまふ。この慈悲を以て衆生に大功德を與へたまふを廻向と云ふ。凡夫の方には一切廻向を云はず、みな佛の方より廻向を談ずるが今宗の特色なり。○度群生 無量無邊の一切衆生を化導す。○彰一心

一心の顯揚

一心とは疑心をまじへざる純一の心にして他力眞實の信心なり。これを宣布するを彰一心と云ふ。『經』の願文に三信を誓ひたまへども、われら凡夫のおこすところのものにあらず、みな如來よりたまはるものなればわれらが手許にありては唯信の一法なり。然るに凡夫これを三信各別の心と謬るを以て合して一心と示し、本願の三信は衆生の方よりは要するに信ずる一心の外なきことをあらはし、以て愚鈍の衆生をして信じ易からしめたまふ。これを合三爲一の釋と云ふ。『和讃』に論主の一心ととけるをば、曇鸞大師のみことには、煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたまふと云ふはこの『論註』の釋意を讚嘆せられしものなり。

三、通釋 天親菩薩は廣くわれら凡夫を救はむとして佛の本願を廻向したまふ義に由り、本願の三信を一心に合してその道理を示し、以て平易に淨土往生の眞因を知らしめたまふ。

合三爲一

四、研究問題 (一) 一心の義相 (二) 合三爲一の釋義

第三節 現當一一益

歸入^{スレバ}功德大寶海^ニ 必獲^ス入^ル大會衆^ニ數^ニ
 得^レ至^ル蓮華藏世界^ニ 卽證^ス眞如法性^ニ身^ニ
 遊^ブ煩惱林^ニ現神通^ヲ 入^ル生死^ニ齒^ニ示應化^ヲ

『淨土論』云、功德大寶海又同云、入第一門者以禮拜阿彌陀爲生彼國、故得生安樂世界等、又云、出第五門者以大慈悲觀、察一切苦惱衆生、示應化身、廻入生死齒、煩惱林中、遊戲神通、教化地、等。

一、大意 一心體得者の受くる利益について現世の益と當來の益とあることを明す。その中初の二句は現益を示し、次の四句は當益なり。當益を明す中、更に得至蓮華等の二句は往相廻向の相を明し、遊煩惱林等の一句は還相廻向の相を示す。

大會衆數

二、字釋 ○歸入 歸依歸入にして一心の信心を獲得したるを云ふ。 ○功德大寶海 南無阿彌陀佛の名號を指す。一切の功德を悉く一名號中に攝むること、海の如くなるが故に譬をあげて大寶海と云ふ。 信の一念に於てこの功德の大寶海を全領するなり。 ○必獲入 位を得るに決定して相違なきこと。 ○大會衆數 大會衆數とは信と同時に得るところの益にして正定聚の位なり。 この位に入るときは身は此世界にありながら淨土の聖衆と縁を結ぶ。これを心は淨土にすみあそぶとも云ふ。 ○蓮華藏世界 この名華嚴經及び梵網經に出づ。今曇鸞大師はこの名を以て彌陀極樂の異名とす。華嚴經に云ふが如き蓮華藏世界は毘盧舍那佛の住するところにして、唯大菩薩のみ往くことを得、餘人はこれを窺ひ知ること能はず。今云ふところの阿彌陀如來の蓮華藏世界は十方衆生共に同じく彌陀願力によつて往生することを得る

の世界なり。 ○眞如法性身 眞如法性共に涅槃のことなり。これに身の字を附して證を開く人を指す。今は滅度の證を開き彌陀同體の果を得たるところを云ふ。 ○煩惱林 諸の煩惱の充ち満ちたるこの世界を林に喩へて煩惱林と云ふ。 ○神通 靈妙不思議なる自由自在のはたらきを云ふ。これに略して六あるを以て六神通と云ふ。謂く一に天眼通、二に天耳通、三に他心通、四に宿命通、五に神足通、六に漏盡通これなり。總じて自在に衆生を救済するの妙用を云ふ。 ○生死菌 上の煩惱林に相應じて句をなす。これを一連にして云へば煩惱生死の菌林にして、三界六道の迷界をさす。 ○應化 應化身の略にして、衆生の機根に應じて適宜に身を變化してあらはれ以て衆生を開導するを云ふ。 三、通釋 われら凡夫が功德の大寶海たる南無阿彌陀佛の名號を信ずれば、佛願力により此世にありながら正定聚の位になり、淨土

の聖者の數に入る。且つ未來西方の淨土に往生すれば、往生と同時に彌陀同體の證を開き、その後は自ら他の迷界の衆生を濟度せんとの大悲心をおこして再びもとの五濁世界に還り來り、自由自在のはたらきをなし、應化身を示して彌陀大悲行の手助けを爲すなり。

四、研究問題 蓮華藏世界の解釋

第九章 曇鸞大師

第一節 師徳の讚嘆

本師曇鸞、梁天子

常向鸞處菩薩禮

三藏流支授淨教

焚燒仙經歸樂邦

「續高僧傳」第六第七等云々、「迦才淨土論」下云々

一、大意 以下十二句は第三祖曇鸞大師の教へたまふところをそ

曇鸞大師

の著論註に依つて説き述べたまふ。その中今の四句はまづ鸞師の徳を讚嘆し、併せて鸞師淨土門に歸したまふことを嘆ず。

二、字釋 ○本師 本宗の祖師にして、實はこの尊稱は七祖に通じてつくべきものなり。 ○曇鸞 支那北方の人、北魏の承明元年（西紀四七六年）雁門に生る。初め廣く内外の學に通じ、中にも龍樹の論著を研究し、四論宗の學者となる。然るに後、菩提流支の勧めにより淨土門に歸し、『往生論註』二卷、『讚阿彌陀佛偈』一卷等をあらはして、大にその教門を宣布したまふ。 ○梁天子 梁國の天子蕭王、即ち梁の高祖武帝なり。 ○常向鸞處菩薩禮 梁は當時南朝の國なり。今師は北魏に居り、偶々梁に遊び蕭王これに遇すること極めて厚く、魏に歸る後も常に師を慕ひ鸞菩薩として禮すと云ふ。以てその高德を知るべきなり。 ○三藏 翻譯者の通稱、智廣くして經律論の三藏を究むるを以てこの名あり。 ○流支 具さに菩提

菩提流支

曇鸞の歸佛

流支と云ひ、道希と譯す。北印度の人、支那に來つて勅を受け、盛んに經律論の翻譯に従事す。○淨教。淨土の教にして『續高僧傳』に記するところによれば、『觀無量壽經』を鸞師に授くと云ふ。○焚燒仙經。初め曇鸞大師は『大集經』の註釋を書かむとせられしが、途中命を終るときはその功を成し遂げ能はざるを慮り、長壽の法を會得せんとして陶隱居を訪ひ、その與ふるところの十卷の仙經を持ち歸る途中菩提流支に逢ひ、仙經によつて會得する長壽は人間界の百年二百年のことなり、敢て長壽となすに足らず。『觀無量壽經』に説き示されたる西方淨土の壽命はこれ眞の無量なりと諄々と説き聞かされ、大に感動して忽ち十卷の仙經をその場に燒き捨て、以て淨土の法門に歸したまひしなり。○歸樂邦。淨土門に歸依するを云ふ。樂邦とは彌陀安樂淨土なり。聖道自力の法を捨て他力淨土門に歸することの速かなるを擧げて以てその人の徳を

讚嘆するなり。

三、通釋 支那梁の天子蕭王は、曇鸞大師の高徳を慕ふのあまり、常に大師の居住したまふ處に向つて鸞菩薩としてこれを禮拜したまへり。斯くの如く天子より尊敬を受けたまひし曇鸞大師は、もと四論宗の人なりしが菩提流支より淨土の教たる『觀無量壽經』を授けらるゝや、忽ちにして所持の長壽法を記せる仙經を燒き捨て、聖道を去つて未來無量壽を得るところの彌陀如來極樂淨土の法門に歸したまへり。

第二節 論註の顯揚

天親菩薩論註解

報土因果顯誓願

迦才、淨土論「三」註「解天親菩薩往生論」裁成「兩卷」論註
二十九種莊嚴の文云々

一、大意 曇鸞大師の教義宣布を述ぶるにあたり、まづ天親菩薩の『淨土論』を註釋して『論註』をあらはしたまふことを述べ、その綱要を示す。

論註製作

二、字釋 ○論註解 『和讃』に「天親菩薩のみことをも、鸞師とよむべたまはずば、他力廣大威徳の心行いかでかさとりまし」と云ふに同じく『淨土論』の意微なるを以て、今これを探つて他力の深義を弘めたまふなり。 ○報土因果 これに二義あり。一に如來が報土を成ずるの因果、二に衆生が報土に往生するの因果なり。今は後義に従ふ。報土の名は道綽・善導の二師に始まり、義は『淨土論』『論註』に備はる。今は後人の名づけたる名を以て前人に備る義に名く。凡そ報土とは因位の願行によつて報ひられ成就せられし淨土にして、彌陀の淨土を指す。通途に云ふところの報土は諸佛の居たまふ土にして、凡夫の全然窺ひ望むところに非ず、況んや凡夫がそ

報土の因果

一因一果

の報土に往生すると云ふが如きことは全く不可能のことなり。然るに今の報土は別願酬報の土にして、凡夫を往生せしめんがために建立したまふところなり。依つて凡夫も願力に乗じて證入することを得。これ彌陀不共の別徳なりと云ふべし。因果とは佛因佛果にして、因は第十八願の信心、果は第十一願の滅度なり。これを一因一果の彌陀の法門となす。 ○顯誓願 彌陀の誓願力に由ることをあらはす。即ち他力の意なり。顯の字また上の註解の二字と相應して、曇鸞大師がよく『淨土論』の幽微なる旨を開顯して、報土の因果は彌陀誓願を成就したまひし因果に依るなりと顯したまふ。

三、通釋 曇鸞大師は天親菩薩の『淨土論』を註釋して『往生論註』二巻をつくり、以て阿彌陀如來が眞實報土を建立したまひし因も果も皆佛の大弘誓願より顯はれしものたることを示したまふ。

四、研究問題 彌陀報土の解釋

第三節 往還廻向の相狀

往還廻向由他力

正定之因唯信心

惑染凡夫信心發

證知生死即涅槃

必至無量光明土

諸有衆生皆普化

〔論註〕下云「廻向有二種相一者往相二者還相等」又云「但以信佛因緣願生淨土乘佛願力便得往生彼清淨土佛力住持即入大乘正定之聚等」又云「無礙者謂知生死即是涅槃等」

一、大意『往生論註』の中に於て最も重要なる釋義たる往還廻向の相狀を示す。その中初一句は往還廻向共に彌陀佛力に由ることを明し、次の三句は往相の因果を明し、最後の二句は還相の利益を示す。

往還廻向

正定の二義

二、字釋 ○往還廻向 往相廻向、還相廻向の二なり。往相とは往生淨土の相狀にして、第十八願の廻向によりこの娑婆世界より西方の彌陀淨土に往生するすがた、第十一願の廻向はその往相の果なり。又還相とは還來穢國の相狀にして、第二十二願の廻向にて淨土より再びこの迷界に來つて他の衆生を濟度するを云ふ。一度淨土に往生して即成佛の證を開くを以て、假令再び娑婆界に來ると云へども、惡業による輪廻とは大に趣を異にし、たゞ大菩薩の行爲なるのみ。而してこの二力共に佛の方よりたまはるものなるが故に何れも廻向の字を附す。上の報土の因果は體についてその高遠なるを嘆じ、今往還廻向と云ふは用についてその廣大なることを嘆ず。○由他力 他力の言葉は曇鸞大師より始まる。彌陀佛力に全托して自己の力を少しも用ひざるを他力に由ると云ふ。○正定 正定について古來二義あり。一には現益として

取扱ひ、現生に正定聚の位に入るを云ふ。二には當益をあらはすものとする。曇鸞大師は常にこれを未來淨土に受くるところの當益として取扱ひたまひ、高祖大師は多く現益としてとりたまふ。而もこの二義は實は一致に歸す。無上涅槃の未來の果が正しく定まるの位は、これ信一念と同時に現在に被るところの利益なり。而してこの位にあるものは未來必ず無上涅槃を證す。二義は決して相離るべからず。○唯信心。名號を體とする信心なり。聞信一念のとき、名號を全領す。然るにその名號は圓滿の功德充滿す。依つて一念の信と同時に眞實涅槃の眞因は決定して動かざるなり。○惑染凡夫。下劣最惡の凡夫。○證知。證得と云ふに同じ。正定聚は此世に在つて得るところの益なるも、正しく滅度を證するは必ず未來淨土に往生して後得るところのものなり。○生死即涅槃。若しこれを現益として解すれば、生死界に迷へる

生死即涅槃

まゝが直ちに、佛果涅槃分の人なりと云ふ。若し當益につくときは、此世に於て信心開發の人、唯本願の一道を信ずるが故に、彌陀如來の大願業力により、迷界凡夫のまゝ、未來淨土に往生して直ちに無上涅槃の證を開くを云ふ。これ往相廻向の相狀なり。現益の意を以て解することを得と云へども、今正しく當益のこゝろを以て解する方了解し易し。○必至。必の字を下の句にのぞめば、無量光明土に至る者は第二十二願力により必ず他の衆生を教化すると見るべし。○無量光明土。盡十方無礙光如來所住のところにして、彌陀の眞實報土を指す。○諸有。三界に迷へる衆生その數多きが故に諸有と云ふ。これを三界六道二十五有に分つ。要するに一切迷界の衆生なり。○普化。到るところの衆生を悉く化益することの自在なるを云ふ。これ本願力に由る還相廻向なり。

三、通釋 衆生が彌陀の淨土に生るゝも、又再び迷界に還り來つて衆生を救ふと云ふも、共に如來の他力本願力に由るものにして衆生自力の功は一分もなし。いまこれを詳かにするに、未來必ず佛になることの決定する因は唯本願力を信ずる一念のところにある。故に如何に煩惱濁惡の凡夫なりとも、一念無疑の信心開發すれば凡夫のまゝ、臨終と同時に未來必ず涅槃の證を開くべし。かくの如くして佛の淨土に往生せし者は、また更に此世界に還り來つて苦惱に沈める諸の衆生を普く化益することを得。而してこの往相還相の利益は皆他力を俟つにあらざれば、われら凡夫の到底自らなし能はざるところなり。

四、研究問題 (一)往還二廻向 (二)正定現當 (三)正定聚と滅度の益

第十章 道綽禪師

第一節 聖淨二門の分判

道綽^ハ決^シ聖道^ヲ難^ク證^ス

唯明^ム淨土^ヲ可^ク通^ス入^ス

〔安樂集〕上云「一謂聖道二謂淨土其聖道一種今時難證乃至尙今末法現是五濁惡世唯有淨土一門可通入路等」

一、大意 以下八句は第四祖道綽禪師に就てその化導を述ぶ。その中初二句は大師がその著『安樂集』に示したまふところにより、聖淨二門の分判を明す。

道綽禪師

二、字釋 ○道綽 道綽禪師は并州の人、陳の文帝天嘉三年(西紀五

六二年)に生る。曇鸞大師の滅後約二十年の人にして、親しく大師に就て師事せられしには非ずと云へども、壯年にして石壁の玄忠寺に詣り、曇鸞大師の碑文を拜し、今まで學び來りし『涅槃經』の研究を打ち捨て涅槃宗を脱し、翻然として淨土の法門に歸したまひしを以て、曇鸞大師より相承すとなす。『安樂集』二卷を著して専ら『觀

聖道

經の意により彌陀の法門を弘めたまふ。○決 決斷して滞ることなく、理ありてよく人の疑を斷ずるを云ふ。○聖道 詳くは聖道門と云ふ。聖果に至るべき因道なり。即ち眞智を以て眞如の理を觀じ、此世界に於て自力の修行を以て成佛せんとする教門を云ふ。○難證 聖道門の證し難き理由として『安樂集』には二由を挙げたまふ。一には釋迦牟尼佛を去ること年時遠きが故に。二には聖道門に教ふる道理はその義甚だ深くして、われら微弱なる智力を以ては到底はかるべからざるが故に。これを難證の理由となす。○唯明等 聖道門と淨土門との中、聖道門を捨て、淨土門に歸することをのみ勧めたまふ。唯の字に揀持、決定、顯勝の三義あり。揀持とは諸佛の法を捨て、阿彌陀の淨土門を取ること。決定とは淨土法を以て自己往生の法と決定すること。顯勝とはこの淨土の法門は永く通途の法に超過し勝るゝが故に。○淨土

淨土

詳しくは淨土門と云ふ。此世界を捨て、彼の蓮華藏世界に往生するなり。この淨土は眞實の報土にして假には通ぜず。諸經中には諸佛の淨土往生を説くものもあれど、諸佛淨土の如きは往生と云へどもたゞ自らの果報に住するが故に眞實の往生にあらず。今はこれ佛の果報にして、これが本願力とあらはれ衆生を攝して佛の果報に住せしめたまふを往生と云ふ。その根本は第十八願なり。○通入 難なる聖道門は凡夫往生については全く塞がれて證入し難く、易き淨土一門は開通して證入し易し。その通入したるところは大涅槃の證果なり。

三、通釋 第四祖道綽禪師は聖道門と淨土門との二門を以て釋尊一代佛教を分判したまひ、聖道門の法は今日われら凡夫にとりては到底悟入し難き法なり。唯彌陀佛力による淨土の一門によつてのみ無上涅槃に證り入ることを得るなり。

四、研究問題 聖淨二門の分判

第二節 萬行と念佛

萬善、自力、貶、勤修、

圓滿、德號、勸、專稱、

〔安樂集〕上云、諸大乘經所辨一切行法皆有自力他力攝他攝乃至不得自局己分徒在大宅也

一、大意 上に聖道門と淨土門とを明し、聖道は證し難く淨土の一門は通入すべき道なりと明したるを以て、今それに相應して聖道門の萬行と淨土門の念佛とを相對し、自力を離れて他力の念佛に歸せよと勸めたまふ。

二、字釋 ○萬善自力 六度萬行はこれ行者自ら修するところの行にして自力と云ふ。これ聖道門の行なり。○貶勤修 貶とは貶抑にしておとしめおさへること、勤修はつとめ勵むこと。○圓

德號

專稱

滿德號 德號とは名號をさす。名號にはあらゆる功德善根悉く充つるを以て、これを圓滿の德號と云ふ。○勸專稱 餘の方へ心をふらず、唯一心に阿彌陀佛の名號を信じ稱へよと勸むること、これ自力の心を離るゝを示す。實は信を勸むと云ふべきところなれど、上に萬善の自力とて行を出したるを以て、それに應じて今亦專稱の行を出す。されど意は名號の德を讚嘆し、他力の信を勸むるにあり。

三、通釋 道綽禪師は聖道自力の心を以て萬行を修するは勞して功なきこと、貶抑し、唯専ら彌陀名號を信じて稱ふることを勸めたまふ。

第三節 凡愚開導

三不三信、誨、慍、懃、

像末法滅同、悲引、

一生造惡値弘誓

至安養界證妙果

「安樂集」上云、「一者信心不淳若存若亡故二者信心不一
謂無決定故三者信心不相續謂餘念間故等」同下云「釋
迦牟尼佛一代正法五百年像法一千年末法一萬年乃
至特留此經止住百年」同上云「大經云縱令一生造惡臨
命終時十念相續稱我名字若不生者不取正覺」

一、大意 上に聖道自力行を捨て、淨土他力專稱を勧めしが、凡愚はその理を知らざる故、更に詳しく三不三信の義を明し、その稱名は三信を具する他力の稱名なることを信じ、造罪の凡夫もこの他力によつて淨土に往生して佛果涅槃を得と示したまふ。

三不三信

二、字釋 ○三不 三不信にして、「一者信心不淳若存若亡故」とて、自力不眞實の信心が不淳にしてつくろひかざるところあり、又「二者信心不一無決定故」とて疑ありて一心ならず、且つ「三者信心不相續餘念間故」とて常に間斷して相續せざるものなるを云ふ。 ○三信

誨慇懃

像末法滅の時代區分

上の三不信に反し、他力眞實の信心に備はれる徳にして、淳心一心相續心を云ふ。 ○誨慇懃 その教誨の懇切なるを云ふ。これについて古來三説あり。第一義に鸞師既に三不三信を明す。今亦これを教示するが故にと。第二義に鸞師はたゞ三不信を示す。今は『觀經』を承けて具さに三信の相を示すが故にと。第三義に『安樂集』前後の文皆專稱佛名を勸むれども、未だ名義の相應と不相應とを分たず。今如實不如實を分つ故に慇懃と云ふと。三義共にその意あるも、第三義恐らく今の正意なるべし。何となればこの三不三信の文こゝにありて前後に貫くを以てなり。 ○像末法滅 釋迦佛の滅後五百年を正法と云ひ、この間は佛の教法も稍完全に遺り、修行する者もあり、随つて證を開く者もあり。然るに正法を過ぎて一千年間は、時代漸く墮落に趣けどもなほ正法に似たる時なるを以て像法と云ふ。その後一萬年の間は教法あれど修行す

る者も證を開く者もなし。この末法萬年を過れば衆經みな滅盡す。この像法末法法滅の三時を像末法滅とのたまふ。○同悲引佛が廣大なる慈悲の心を以て常に衆生を導きたまふこと。既に『大經』には法滅の時にあたつても尙衆生を憐愍して百年間特に『大經』のみは留め置くべしと説きたまふ。今この『正信偈』に於ては更にこれを道綽禪師の悲心に移し、禪師が『安樂集』に於て像法末法は云ふまでもなく、一切諸經の滅盡する法滅の時代の衆生をも引導して彌陀の本願に歸せしめたまふと云ふ義をも併せて顯したまふ。○值弘誓。弘誓とは弘願の誓願力にして、第十八願をさす。これを信じ行ずるを値と云ふ。○至安養。阿彌陀佛の極樂世界に往生す。○證妙果。大涅槃の證を開くなり。即ち淨土に往生すると同時に即成佛す。これ本願の勝徳にしてまた彌陀淨土の土徳なり。

三、通釋 道綽禪師は曇鸞大師がその『論註』に既に三不三信を明したまふうへに、更にその『安樂集』にこれを詳しく懇切に示して眞實信心を勧め、正法は云ふに及ばず、像法末法法滅の時代に亘つて變りなく一切衆生をよく救ひたまふ彌陀の本願を宣べて、われら衆生を齊しくあはれみたまふ。末代われら凡夫が假令一生の間罪惡を造ると云へども、不思議の本願力に歸すれば如何なるものもみな安養の淨土に往生して大涅槃の妙果を證すと述べたまふ。

四、研究問題 三不三信

第十一章 善導大師

第一節 佛正意の開顯

善導獨明佛正意

善導大師

一、大意 第五祖善導大師の教義を詮表せらるゝに八句あり。初一句は大師が佛の正意をよく明かにしたまふことをあぐ。

二、字釋 ○善導 善導大師は隋の煬帝太業九年（西紀六一三年）に生れたまひ、主として『觀無量壽經』の講述に全力をそゝぎ、『玄義分』『序分義』『定善義』『散善義』の四帖の疏をつくり、又廣く淨土の法門を讚嘆したる『觀念法門』『法事讚』『往生禮讚』『般舟讚』を著したまふ。世にこれを五部九卷の聖教と云ふ。而して大師は晩年多く終南山に居を占め、たまひしを以て、これを終南大師とも云ふ。○獨明 善導大師の當時淨土法門の機運大いにあらはれ、身自ら聖道門にあつて聖道の教行を修しつゝ、而も淨土の經たる『觀無量壽經』を註釋せし者多し。その有名なるものは淨影寺慧遠、嘉祥寺の吉藏、天台の智顛等なり。然れ共これらの諸師は皆聖道門的見解を以て解釋せし故に經の本義を失ひ、『觀經』を自力教とし、當時の人々を惑

はずところ甚しかりしかば、善導大師はそれら諸師に對して獨り經の本義を顯し、佛の正意を明にしたまへり。これを古今楷定と云ふ。若し大師出世したまはざりしならば、淨土の教門は全く閉塞せられたりしならむ。大師の功績大なりと云ふべし。○佛正意 『觀無量壽經』は正しく凡夫を本となすの經にして、聖者はむしろ傍とす。然らばこの經については凡夫往生の一路を示すが佛の本意なり。

三、通釋 善導大師は當時諸師が淨土の教門を誤つて解釋せし中に、唯獨り佛の正意を明かにし、凡夫爲本の宗要をあらはしたまふ。この旨『觀經』の疏に明かなり。

四、研究問題 古今楷定の功績

第二節 所化の機と能化の法

矜哀定散與逆惡

光明名號顯因緣

「玄義分」云「世尊定爲凡夫不爲聖者」
「禮讚」云「若以願行來收非無因緣然彌陀世尊本願深重誓願以光明名號攝化十方」

一、大意 上の善導大師が佛の正意を明かにしたまふの句をうけて、佛は一切善惡の機を普く救ひたまふ。殊に劣惡の機をあはれみこれを本としたまふことを明し、この機に被る法は彌陀弘願他力の法門の他にあることなしと示したまふ。

定散の意

二、字釋 ○矜哀 憐むこと。 ○定散 定善を修する機を定機と云ひ、散善を修する機を散機と云ふ。定善とは心を一所に凝して修する善を云ひ、散善とは散動する心のまゝに修する善なり。要するに自力の萬善萬行を廻向して往生せんとする機をさして定散諸機と云ふ。 ○逆惡 五逆十惡の惡機なり。上の定散と合して一切善惡の凡夫と云ふ。 ○光明名號顯因緣 因は親しく果を

兩重の因緣

生ずる力あるもの、緣は因を助けて果を生ぜしむるものなり。光明と名號とは、凡夫の淨土に往生するについての因緣となるを云ふ。即ち凡夫の淨土に往生するは全く他力に由るものなるが、その他力を顯すについて、光明の緣に照らし催され、往生の正因たる名號を獲得す。この光明名號の因緣によつてわれら凡夫の往生は満足するなり。さてこの光明名號の因緣と云ふこと、これを如來のわれらを助けたまふ法の方より云ふときは、今の所談の如く光明の緣によりて名號の因を行者に與へ、以て往生の益を得しめたまふ。然るにこれを行者の上より云ふときは信心を内因として光明に攝護せられ名號の徳をよろこびつゝ、往生の果に至る。この二方面よりの所談を兩重の因緣と云ひ、高祖「行卷」に示したまふところ、初重は名號を因とし光明を緣としてよく報土の眞身を得ることを示し、後重は信心を内因とし光明名號を外緣として報

土往生の果を得るを明すなり。かくの如く兩重の因縁分れたれども、その旨趣は同一にして畢竟は彌陀佛力の廣大なることを示すにあり。

三、通釋 善導大師は『觀經』に示すところの定善の機・散善の機は共に凡夫なりとし、これらの機も五逆十惡のわれらも到底往生の見込みなきものなれば、深くこれをあはれみたまひ、阿彌陀如來の本願他力によりてこれら一切のもの皆救濟せらるゝことを説きたまふ。即ち佛の光明と名號との因縁によりて、われら凡夫も皆往生を遂ぐべきなり。

四、研究問題 光號因縁

第三節 信心の體とその利益

開入本願大智海

行者正受金剛心

慶喜一念相應後
即證法性之常樂

與韋提等獲三忍

【玄義分】云「開示長劫之苦因悟入永生之樂果」又云「正受金剛心相應一念後」【序分】云「亦名喜忍亦名悟忍亦名信忍」又【玄義分】云「捨此穢身即證彼法性之常樂」

一、大意 上に光明名號の因縁を示し、その法よく一切善惡の機を救ひたまふことを明せしを以て、今それをうけて衆生がその法を信ずる金剛慶喜の心を明し、その得益を述ぶ。

二、字釋 ○開入 道を開いて他力門に悟入すること。 ○本願大智海 如來の大智慧圓滿せる第十七願の名號なり。本願は正しく第十八願の別名なれど、名號はこの本願の義を備へたる尊號なるを以て本願名號と云ふ。而してこの名號には眞如一實の智慧圓滿するが故に海に喩へて本願大智海と云ふ。 ○行者 有縁の人をあぐ。 ○正受 三昧の譯語なり。今は聞信のこと。 ○金剛

法金剛喻金剛

心。金剛不壞の眞心にして、横超他力の信心なり。これについて法金剛と喩金剛とあり。法金剛とは即ち佛智は體無漏にして破壊すべからざる眞心なるが故にこれを金剛心と云ふ。又喩金剛とはこの眞心を受領せし衆生の信心は他力廻向のものなるが故に、如何なる縁に遇ふとも壞損せず、他のために打ち碎かれざるが故に他力信心を金剛心と云ふ。○慶喜一念。慶喜即一念なり。一念とは信ずる初一念のところ、安堵決定の無疑心なり。生死界に沈淪して迷ふ恐怖を信一念のところ、念のところに全く免るゝが故に、信心のところが慶喜の心あるなり。○相應後。衆生の信心が佛智に相かなふを相應と云ふ。後とは信前に對して後と云ふ。事實は信一念と同時なり。依つてこの句は他力の大信心を得し時と云ふ意なり。○韋提。韋提とは具さに韋提希と云ふ。中印度摩伽陀國頻婆娑羅王の妃なり。太子阿闍世に幽閉せられ、釋尊

韋提希夫人

の降臨を乞うて『觀無量壽經』を聞き、信獲得して正定聚に住し、無生法忍の益を得られし人なり。○三忍。無生法忍を開いて三とせしものにして、喜忍、悟忍、信忍を云ふ。忍とは確に定まること、信心に於て喜を生ずる故喜忍と云ひ、悟に入るを以て悟忍と云ひ、佛智を信ずるが故に信忍と云ふ。然らばこの三忍機相にして、而も法徳より云へば三相隔別に非ず。喜悟の二忍は一信忍中の義差別なり。故に今信忍を開いて三忍とす。要するに通途の無生忍に超過したる甚深のものにして、初歡喜地とも便同彌勒とも云ふ。○即證。上は現在に於て得る益を述べ、これは未來淨土に於て受くる利益をあぐ。即ち淨土に往生すると同時に證り入ること。○法性之常樂。佛果滅度の證果なり。法性とは眞如のこと、常樂とは涅槃の四徳たる常樂我淨の中、二をあげて餘の二をこの中に攝す。常とは涅槃は永く異變なきが故に、樂とは苦を離るゝが故

に、我とは自在なるが故に、而して淨とは涅槃は煩惱の穢濁なきが故に、淨土の眞證を法性之常樂と云ふ。

三、通釋 佛智たる名號法を聞き開いてこれに歸入すれば、われらは皆正しく金剛堅固の信心を受領して、一念よろこぶ信心が本願のまことに相かなふならば、それと同時に現世に於ては『觀經』にあらはれたる韋提希夫人と等しく喜悟忍の三忍を得、命終れば報土に往生して法性眞如の證を開き、常樂我淨の徳を得べしと善導大師は勧めたまふ。

四、研究問題 韋提得忍

第十一章 源信和尚

第一節 自行と化他

源信、廣開一代教

偏歸安養勸一切

「往生要集」序云「夫往生極樂教行濁世末代之目足也道俗貴賤誰不歸者乃至聊集經論要文披之修之易覺易行」

一、大意 以下八句は第六祖源信和尚の教へたまふところを述ぶ。その中初の二句和尚自ら淨土の法門に歸すると共に、他にもこれを勧めたまふことをあぐ。

源信和尚
二、字釋 ○源信 源信和尚はわが朱雀天皇天慶五年（西紀九四二年）大和國當麻に生る。早く父を喪ひ、母の手に育てられ、比叡山に修學して深く天台の學を修む。後心を翻して厚く念佛を修し『往生要集』三卷を著す。この著述は忽ちこれを見るときは相承の典籍となすべからざるに似たれども、深くその意を究むるときはよく聖道の人を誘引して淨土門に歸せしむべく、巧妙なる釋を施したまふものと云ふべし。○廣開一代教 本師は比叡山修學中經

藏に入りて一切經を繙くこと前後五回に及び、出離の一大事を探求し、終に往生極樂の教行を選びたまふ。○安養 彌陀西方極樂の名なり。自らこれに歸したまふ。○勸一切 化他を嘆ず。一切とは道俗貴賤等貧富等一切をさして云ふ。自行化他その正意は本願念佛の一門にあり。

三、通釋 源信和尚は廣く釋尊一代の教法を閱覽し、その中に於て自ら偏に安樂に歸するの道はたゞ念佛にあるのみと知り、亦一切の世の人々にもこれを偏に勧めたまへり。

第二節 二修と二土

專雜、執心、判淺深、

報化二土正辨立

『往生要集』下本「安樂集」一禮讚を引き、處胎經の文を引き、後更に「群疑論」を引て云々

專雜二修

一、大意 源信和尚の説き述べたまふ教義の中、先づこの二句は專修雜修の二修と、報土化土の二土とを對辨してその得失を示したまふ。

二、字釋 ○專雜 專とは專修正行にして、専ら念佛を修し自力を離るゝもの、これ弘願の正定業なり。雜とは雜行を雜修することにして、自力を離るゝ能はざるもの、これ淨土の行に非ず、自力心を以て往生の因に擬する要門の諸行なり。○執心 心にとりたもちて失はざること。この中念佛の一行を心に執持するを專の執心と云ひ、雜多の行を雜へ修するを雜の執心と云ふ。○淺深 專修の人は所謂善聞深法にして、佛の願力を以て往生すると信ずる他力廻向の信なるが故に、深法が心に入るより深心と云ひ、雜修の人は凡夫自力淺薄の心に修造するが故に淺心と云ふ。○報化二土 報土とは佛眞實の因願に報ひてあらはれたる淨土なり。こ

報化二土

れは眞實にして虚妄を雜るゝが故に亦眞土とも云ふ。化土とは彌陀淨土中に於てしばらく衆生の機縁に應じ方便して化現せる國土なり。假に化現せしものなれば方便化土、又は假土と云ふ。眞佛土の體より云へば眞實の一なれども、假より入るものは佛の眞證に達すること能はず、機感よりして邊地懈慢界を見るなり。

○辨立 阿彌陀佛の淨土は法報應三身土の中にては報身土にして化身土にあらず。然るにその所謂報身土の中に於て更に報化二土を分別し、他力の行者專修の人は佛智に相かなふが故にその往生は即ち報土の往生なり。然るに自力の行者雜修の人は未だ佛智にかなはざるが故に佛の眞實報土に往生すること能はず、佛方便力に由つて暫く化現せし化土に往生すると相對して辨別成立したまふ。これわれゝ衆生に專修を勧め、以て報土に往生せしめむが爲の深き思召なり。

三、通釋 源信和尚は専ら他力に歸する專修と、自力雜善の雜修とを分ち、專修は佛の廻向によりてその心深く、雜修は凡夫自力心なるが故に心淺しと分別したまひ、かくて專修深心の人は彌陀眞實の報土に生れ、雜修淺心の者は化土に生るゝのみと辨別し、以てわれら凡夫に對し、專修によつて報土往生をなすべしと勧めたまふ。

四、研究問題 (一)專雜二修の分別 (二)報化二土の辨立

第三節 專修の現益

極重、惡人、唯稱佛、
 煩惱障、眼雖不見、
 我亦在、彼攝取、中、
 大悲無倦、常照我、

「往生要集」下本云「觀經云極重惡人無他方便唯稱念佛」
 「得生極樂」同中云「我亦在彼攝取中煩惱障眼雖不見」
 「大悲無倦常照我身」

一、大意 上に專雜の得失を明し、專修を勧めしを以て、今の四句は

專修の利益を明す。四句中初一句は專修の相を示し、次の三句は攝取の利益を明す。

二、字釋 ○極重惡人 『觀經』に九品の機類を出す中の下三品の惡機にして、五逆十惡のわれら凡夫なり。○唯稱佛 上に示すところの專修なり。弘願他力の稱名なれば稱へし自功を論ぜざるなり。○我亦 我とは源信和尚自らをさし、亦とはわれら極重惡人について云ふ。專修念佛の者は假令極重惡人と云へども必ず攝取の益を蒙るなり。

三、通釋 五逆十惡の如何なる大罪人と云へども、心に専ら彌陀を信じ、その御名を稱するものは、必ず彌陀大慈悲の光明に攝取せらる。我も今現にこの佛光明中に在り。而も攝取の光明中にありながら、われは自己が煩惱のために眼を障へらるゝが故に、その光明を拜すること能はざれども、彌陀の大悲は倦み疲るゝこと

なく常に照してわが身を護りたまふ。然らば機の相より云へば不見なるも、法の方より云へば常照なりと云はざるべからず。

第十三章 源空上人

第一節 智解と悲心

本師源空明佛教

憐愍善惡凡夫人

一、大意 第七祖源空上人の教義を述ぶるに八句あり。その中初の二句は上人の智慧と慈悲と共にすぐれたることあげてその高德なるを嘆ず。

源空上人

二、字釋 ○本師源空 源空上人はまた法然上人と云ふ。もと美

作の人、崇徳天皇長承二年(西紀一一三三年)に誕生せらる。幼にして出家し叡山に學び、後黒谷の報恩藏に入り一切藏經を披見する

智慧第一の法然

こと五遍終に善導大師の『觀經』の疏を熟讀するに及び、その『散善義』の文に「一心に専ら彌陀名號を念じ、行住坐臥時節の久近を問はず念々に捨てざるもの、これを正定業と名く。彼の佛願に順ずるが故に」の文に至り、深く他力念佛の主旨を悟り、それより吉水に草庵を結んで専ら念佛の一門を弘通せられたり。その著述には『選擇集』二卷あり。念佛往生の奥義をよく詮顯せらる。○明・佛・教 一切經を閱讀して當時智慧第一の法然房と稱せらる。こゝに佛教と云ふは一代佛教を通じて聖淨二門の教を指すと雖も、その明すところの要は淨土門他力念佛にあることを、上人の智解を以て明かにしたまふ。○憐・愍・等 世の善人は自負し惡人は自棄す。俱に生死を出ること能はず。こゝを以て今師はこれを憐れみたまふ。

三、通釋 本宗の祖師源空上人は廣く一代佛教を明かにし、智慧に

於て當時第一人者として知られしのみならず、廣く一切善惡の凡夫を憐れみたまひ、化他の方面にも大に盡されたり。

第二節 片州弘通

眞宗教證興片州 選擇本願弘惡世

一、大意 この二句は上の化他をうけて、上人が淨土眞宗をわが國に弘めたまふことを明す。

二、字釋 ○眞・宗 眞實の宗旨にして、具さに淨土眞宗と云ふ。『唯信文意』には「眞實信心をうれば實報土にむまれるとおしへたまへるを淨土眞宗とすとしるべし」と。然るに『選擇集』の中には明かに淨土眞宗の名出ですと云へども、今師の淨土宗は即ち淨土の眞實宗なるを以て、今こゝに淨土眞宗と示したまふ。○教・證 詳しくは教行信證と云ひ、又教行證と云ふ。『大經』に明されたとこ

眞宗の名義

選擇本願

ろの衆生往生の行たる南無阿彌陀佛を信じて彌陀の淨土に往生することにして、所謂念佛往生の一道なり。凡そ何れの宗にも教行證の三法あつて、教の如く修行して證果を得べきなれども、末法濁世の今時に在つては行證全く絶望なり。これに對して淨土眞宗の三法は願力の所成なれば何れも衰變あることなく、三法具足してよく時機に相應す。○興片州 興は興隆なり。片州とはわが國をさす。わが國は海中に孤立して猶し木片の大海に浮べる如くなるが故に。○選擇本願 具さに選擇本願念佛と云ふ。これ如來廻向の眞實門にして、四十八願中特に第十八願に名く。これ別願中の別願なるが故なり。機について云へば信心正因、法について云へば名號の獨り立ち働くところ、これを選択本願の念佛となす。○弘惡世 五濁惡時の惡世界に弘通するなり。上の片州は處につき、今は時を云ふ。時を簡はず處をきはざるが他力

弘願の念佛なり。

三、通釋 源空上人は他の聖道門に異りたる淨土眞宗の教行證をわが國に興隆し、如來選擇本願を弘通したまへり。

四、研究問題 (一)淨土眞宗宗名の義趣 (二)三法四法 (三)選擇本願

第三節 信疑決判

還來^{スルコトハ}生死輪轉^ノ家^ニ
速入^{ルコトハ}寂靜無爲^ノ樂^ニ

決^{スルニテ}以^テ疑情^ヲ爲^ス所止^ト
必^ズ以^テ信心^ヲ爲^ス能入^ト

「選擇集」本云「當知生死之家以疑爲所止涅槃之城以信爲能入」

一、大意 先に選擇本願弘通の功績をあげしを以て、この四句は選擇本願の本義を顯して信疑決判を示す。その中初の二句は疑情の失を示し、後の二句は信心の得益を明す。

輪轉

二、字釋 ○還來 往還去來にして三界生死を出でざるを云ふ。
 ○生死輪轉家 三界に名く。迷界は生ずれば死あり。死すれば亦生あり。これを繰り返して車輪の轉ずるが如く、何時を始とも何時を終とも分たざるを以て輪轉と云ひ、凡夫の止住するところなるが故に家の字を用ふ。○疑情 信の反なり。本願力を聞いて而もこれを信ぜざる心を云ふ。○所止 能止の義にして止まり所と云ふ意。一切煩惱は往生の障とはならず、たゞ本願を疑ふ疑惑の心こそわれらを三界に止むものなり。即ち所の字は能所相對の所にはあらずして助字なり。○速入 信獲得の行者が臨終と同時に往生即成佛の大果を得ることの速なるを云ふ。實は同時を指す語なり。○寂靜無爲樂 寂靜も無爲も共に涅槃の異名なり。涅槃は煩惱の諍雜を離れて靜なる故寂靜と云ひ、凡夫のはからひを離れたる故無爲と云ふ。樂とは洛と音通じ西方極樂

無爲

信疑決判

を指す。○信心 他力廻向の大信心なり。○能入 能所相對の能なり。淨土が所入の土なるに對し、信はよくその土に入ることを得るの因と云ふ義。かくの如く信疑を以て迷悟を判じ、往生の得不を語ることは、聖道門の諸教になきところ、唯弘願絶待の法門にのみ談ずるところなり。高祖大師はこの法然上人の本意をうけてこの旨をよく傳持したまふ。同じく法然上人門下の手に依つて開かれたる西山鎮西の諸流派の説くところは、只皮相の見解なるのみ。善惡の因により苦樂の果を招くは佛教の常に談ずるところ、未だ疑情を以て苦の因となすことを聞かず、本願疑惑の行者と云へども聖道または要門眞門を修すれば應分の證果を得べし、如何と云ふに、今は迷悟の因果を論ずるにあらず、信疑を以て往生を得るや得ざるやを判斷するところなり。善惡の業は往生に就て何等關係するところなし。佛願力廣大なるが故に佛智を信

じて往生し、これを疑ふて往生を得ず、流轉生死を重ぬると判ずるなり。

三、通釋 われ／＼衆生が車輪のまはる如く際限なく生死三界を迷ひ廻るは、本願を疑ふ疑情あるが故なり。もし佛智より授けられし他力廻向の信心さへ領得すれば、臨終と同時に必ず西方淨土に往生し、即成佛の證を開くことを得。故にわれ／＼は速に疑をはなれて信心を獲得し、大安樂の身となるべしと源信和尚はすゝめたまふなり。

四、研究問題 信疑決判

第十四章 結 勸

弘經、大士宗師等

極濟無邊極濁惡

道俗時衆共同心

唯可信斯高僧說

「大經」上云「極濟無極」玄義分云「道俗時衆等名發無上心」散善義云「唯可深信佛語專注奉行」

一、大意 この四句一偈の最後にありて七祖の釋を讚嘆したるを結び、以てわれ／＼に七祖の說を信ずべしと勸めたまふ。また兼ねては正信偈の題號に承應し、信を以て一偈をつらぬく事を示し、眞宗の肝要は唯彌陀の本願を信ずるにありとあらはしたまふ。

二、字釋 ○弘經大士宗師 弘經の二字は大士宗師の二にかゝる。上來奉ずるところの七祖共に眞實經を弘傳したまふを云ふ。大士は龍樹天親の二菩薩を指し、宗師とは曇鸞大師以下各祖をあぐ。七祖その説明方法を異にすと云へども、最後の歸趣は唯一にして、極惡の劣機を救ひて生死海を盡さしめんと欲するにあり。○極濟 救濟すること。○極濁惡 五濁惡時惡世界の衆生を云ふ。

○道俗時衆 出家在家一切の人々なり。時衆とは高祖大師御在世當時の人をあげ、將來有縁の衆生たるわれら一切衆生を攝す。
 ○共同心 和合すること。信ずるところ別なきを云ふ。○斯高僧説 龍樹以下の七祖を指す。高祖大師の教法は全く傳法七祖の説に依る。七祖は皆本願の本義を説き述べたふ。然らば上來の所説一語として私意を加へず、如來の教法を我も信じ人にも教へ聞かしむるが親鸞聖人の意なり。
 三、通釋 上來述べ來りし如く、印度に於ては龍樹・天親の二菩薩、支那にあつては曇鸞・道綽・善導の三師、而して日本に於ては源信・源空等の諸高僧が相ついで釋尊眞實の經意を示し、彌陀の本願を弘め、以て五濁惡時の迷界に沈淪する無數無量の衆生を救済したまふ。世に住める人々よ、その姿の出家たると在家たるとを問はず、共に心を同じくしてかの相承七祖僧の教へたまふところを信ぜざる

べからず。これ即ち彌陀釋迦二尊の本意に契ひ、大弘誓願を信ずる所以なり。

正信偈略釋終

大正十五年四月十日印刷
大正十五年四月五日發行

正信偽略釋

定價金壹圓

不許複製



著者

平安專修學院
京都市大宮通七條上ル

代表者

渡邊隆勝

發行者

京都市油小路御前通上ル

清水精一郎

印刷者

京都市北小路新町西入

須磨勘兵衛

印刷所

京都市西洞院七條南

内外出版株式會社

發行所

京都市油小路御前通上ル

興教書院

振替大阪一〇八一五東京四二二三

511
145

終